
流れない涙

雨宮羽音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れない涙

【Zコード】

Z0013D

【作者名】

雨宮羽音

【あらすじ】

うちき主人公、十夜は、ある日、隣に知らない女の子、夕奈が引越してきた。しかし、夕奈は二重人格で、もう一つの人格は殺し屋らしい。

第一話（前書き）

はじめまして、あまみや まおひ 滝宮涼音と申します。この小説は最近書き上げた小説です。全く普通な恋愛ものです。すこしうつぶえつちシーンがありますので、R15にしました。よろしくお願いします。

第1話

僕は深く眠りについた。

夢を見ている。

僕は夜の大草原に座っている。

周りに誰もいない、何もない。ここにあつたのは、私を迎えるよう、軽く揺れているススキしかない。

「ここはどう?」

と、僕は咳く。

しかし、その話は、誰にも届かない。

「はああ、ベッドに寝ていたはずなのに、なんでここにいるのだろう

う

僕は嘆く。

ふと空に顔を仰向けて、今の夜空の景色を堪能する。

「ここが現実の世界だつたらいいのに」

しばらくすると、僕は頭を左右に振った。

「いけない、大切な人が僕を待っているから、ここにいてはいけない」

僕は気がついた。素敵なこと、ものは長続きしないこと。一番重要なのは、その限られている時間を大切にすること。
きらきらときらめく星の中に、すばやく流れている一つの星が目に映っている。
それが間違いなく、流れ星だ。

僕は目を閉じて、プリストが祈祷してうるるように祈る。

「どうか、元の世界に戻れますように」

「うふふ

慣れない声が、耳にした。

見たことのない女性は私に向いて、話し始めた。

「あ、あなたは誰?」

「今はあなたに教えることができないのです。ただ、あなたに伝えたいことがありますから、ここにきました」

「笑いたい時に笑う、泣きたい時に泣く、それは、私たち生まれてから分かる常識……」

「それは当たり前のことだ」

わけの分からないことを聞いて、僕はぽかんとしている。

「ただ、さまざまの感情の中に、もし、一つの感情が奪われて、これからも表せなくなつたとすれば、あなたはどうします?」

「一体何を伝えたいのか? やっぱり分からぬ」

「では、私はそろそろ行きますから。さよなら」

「ちょっと、待って……」

突然、夜空から、光が現れ、やがて柱になり、僕を照らした。

「なんだよ、この光は」

僕は思わず手でかざす。

でも、その光がだんだん広まつて、僕を包み込んだ。

「うわあああああ……」

目を開けると、僕がベッドにいた。お母さんが部屋のカーテンを明けたせいで、光がそれを通して、目が痛くなつた。

「眩しいよ、お母さん」

「十夜ちゃん、いつまで寝てるの? 早く起きなさい、そうしないと、また遅刻するよ」

お母さんが仁王立ちして、僕を促した。

「お~か~あさん、今日は日曜日だったのに……」

「あら、『ごめん』『ごめん』、忘れちゃつた……えへ」

お母さんは子供のように笑つて、スルーした。

「じゃ、もうちょっと寝かせて」

僕はお母さんにせがむように言つ。

「まあ、今日は学校ないから、特別にしてあげる」

「特別か……僕は心の中に苦笑いした。

「あんまり寝すぎると、体がだるくなるよ」

その言葉だけを残して、お母さんは部屋から出た。

「つああああ

僕は欠伸をかみ殺せなくて、そのまま出た。

ちよつとベッドの隣に置いてある田舎まし時計を見ると……

「ええええ、もう三時過ぎだ」

一体どれぐらい寝たんだろう、僕さえ分からない……

お母さんが言つたことが当たった。

「あら、もう起きたか？ おやつを準備してゐから、早く再度して

「はい」

たくさん寝たの、元のまだ眠い……

僕はしぶしぶと起き上がった。

顔を洗つて、そして、居間へ向かつた。

ちよつと、お母さんが焼きたてのトーストを持つてきた。

こんがりと焼けたトーストの香りが漂つて、食欲をそそる。

「いいタイミングだね、さあ、冷めないしつこいぱぱこ食べてね

「ジャムはここにあるから、つけて食べてね」

「うん

「おこし……」

あつといふ間に、トーストは全部平らげりやつた。

「そんなにお腹がすいてるの？ 十夜ちゃんもずいぶん育ちがかり

だね

「ねえ、お母さん

「なに？」

「僕、変な夢を見た……」

「何の夢？」

「夢の中に、知らない女の子が僕に、変なことばっかり言って、一つの感情が奪われたらどうするのかって、全然分からぬ……でも、僕、すつごく不安だ、もし、その話が本当だったら……」

僕は戸惑いながら、お母さんに昨日で見た夢の話を語った。

「心配しないで、十夜ちゃん。あなたはいい子だから、絶対誰から何も奪われたりしない。私が十夜ちゃんを守るから」

「お母さん……」

お母さんはそつとして、僕の頭を撫でる。それが、僕だけの、お母さんの温もりだった。物心がつく前に、お母さんとお父さんがもう離婚した僕にとっての大切な人は、お母さんしかいない。

お母さんは仕事しながら、手塩にかけて僕を育て続けている。それは決して簡単なことではない、と僕が分かっている。だから、僕はあまりお母さんにあれこれを要求しない、おもちゃとか、綺麗な服とか。ただ、お母さんと安らかに過ごせるだけで満足だ、それ以上は願わない。

学校でも友達と仲良く過ごしていく、喧嘩もあまりなく。なかなか楽しい生活を送っていた。お母さんもできるだけ僕の要求を満足して、私が悲しまないよう育てている。

それで、僕はいつも一つの感情が欠けているような気がする。それが長続きしないと分かつてながらも……

「さてさて、今日はどこも行かないで、家にゆっくりとくつろぎな

れー」「うそ」

……

夕方になつて、お母さんは晩ご飯の仕度をし始めている。

「今日の晩ご飯、何にしたい？」

「えっと、ハンバーグはどうかな？」

僕は思わず答えた。何故なら僕はお母さんが作ったハンバーグが大好きだから。

「ハンバーグか？ よし、そうしよう」

「あら、十夜ちゃん、ちょっとハンバーグのソースが足りないけど、近くのスーパーに行つて、買ってきてくれない？」

「うん」

僕はすばやく出かける。

「十夜ちゃん、お金まだ受け取つてないよ」

ちょうどそのとき、知らない女の子とばったり会つた。

ゆっくりと沈んでいる太陽の茜色に染まるように見える髪は、風の動きにそつて、そつと揺れている。青色の瞳は、遙かなところを見ているように見える。すべすべとした肌は、まるでマシュマロのようだ。ひらりとしたワンピースはパラソルに見える。少女はすこし髪をいじつて、なびかせる。

「ふふふ」

少女が私に挨拶したがるようだ、微笑んでいる。

「あつ……」

僕はぎくしゃくとした。

見たことの無い少女が僕の目に写る。確かに、隣はおばさん一人しか住んでないのに、おばさんの友達なのかな？ もしかして、おばさんの私生児？ そんなハレンチなことを……ああもう、僕は何を考えている？

なにより、ソースを買つてくるのが優先事項だ。

僕はそのまま女の子を無視して、隣のスーパーに向かう。

「いらっしゃいませ」

店員はいつもの営業スマイルで僕に挨拶した。

「ソースをください」

「ソースですね、こちらになります」

「ありがとうございます」

皿の前には、いろいろなタイプなソースが置いてある。僕はびつちこじょつか悩んでいる。よし、適当にしよう。

僕はソースを持つて、レジに向かう。

「ありがとうございます、280円になります」

「はい、えっと、あれ？」

「どうしたんだい？」少年

「財布忘れちゃった……」

「こりゃ、それじゃだめだらう、お金ないと、商品を買えないぞ」「すみません、お金を持つてくる」

さつき出かける時、忘れたに間違いない……仕方ない、もう一度家に戻つて、お金を取りにしかない。

家について、廊下から家まで歩いている途中、またその子と出会つた。もしかして、ずっと僕のことを待つているのか？ いや、見たことのない女の子は、絶対私のことを待つているなんてありえないから……

「君は、さつきの……」

「……」

少女は黙々としている。

「さつきはすみませんでした」

「……」

少女はあいかわらず、何も話さない。このままじゃ話が進まない

「隣の203号室に住んでる十夜です、よろしく。」

「えつと……」

少女はスカートの裾を掴んで、すこし身体を低くしている。

「今日引っ越したばかりの夕奈です。この町についたばかりですか
ら、いろいろわからないことがあります。よ、よろしくお願ひ
します」

夕奈は顔を傾けて、顔が紅潮した。なんだかその初々しい姿がかわいいと思える。

「これから買い物に行くから、一緒に行く？」

「うん」

夕奈は頷いた。

「ちょっとお金を受け取りに行くから、ここで待つて」

「分かりました」

僕は急いで家に戻って、お母さんのところへ行く。

「おかえり」

「お母さん、すみません、お金を忘れて、貰えなかつた」

「いいよ、ほら、手を出して」

僕はお母さんからお金を受け取つた。

「行つてきます」

と詫ひで、家から出よつとした時……夕奈がドアの前に立つている。

「夕奈ちゃん、外で待つて言ひたじゃない？」

やばい、戻りし忘れてた……このままじゃお母さんと迷路でし

まつ

「十夜くんが遅いですか……」

「あ、ごめん」

よりによつて、お母さんがこいつに向かつてくれる。まずは、これ

じゃ絶対誤解される。

「あら、十夜ちゃん、おめでとう~」

違つ……

「お~か~あ~さん、知り合つたばかりの友達だよ、友達……」

「はい、分かつた、分かつた、ふふ」

どうやらすっかり誤解されてしまつたようだ。

「夕奈ちゃん、よかつたら、今日の晩ご飯、一緒に食べませんか？」

「い、いいです……」

恥ずかしがらないでよ、誤解が解かなくなる……

ああ、今から悔やんでも後の祭りだ。

「とりあえず、行つてきます、夕奈ちゃん、早く

「あつ、はい」

そんな気まずい空気を解けるよつ、僕たちはすたすたと家から出た。

「待つて」

すっかり、夕奈のことを忘れてた……

「今どこへ行きます?」

「うーん、スーパーに行つて、ハンバーグのソースを買づ、それだけ」

「ハンバーグですか? あたし、大好きです」

「僕も大好きだ、特にお母さんが作ってくれたハンバーグは最高だ」

「では、楽しみにしていますね」

淡々とした会話を続きながら、スーパーに着いた。

「さつきの少年じゃない? 彼女まで連れてきたのかい?」

だから違つてば……

「とにかく、お金を持つてきたから……」

わざと話をばぐらかした。

「はい、300円」

「毎度あり」

ソースを買って、僕たちは家に戻つた。

「ただいま」

「おかげり、ソースを買つたよね?」

「はい、これ」

「じくろうせま、じゃ、今から晩ご飯を作るから、出来上がるまで待つてね」

「は……イ」

「はい」と言つたのに、「い」の発音が、お腹からのぐーぐーと鳴つている声が家に響き渡つて、遮り切れやう。

「くすくす」

夕奈は片手で口をかくして笑つてゐる。その微笑みは、まるで天使のようだ。

つて、やういう話じゃない。

ああむづかしくて仕方がない……

「十夜ちゃんは男だから、もづちよつと我慢できるよね？」

そこまで言われたら、我慢するしかなー。

「頑張ってね、くすくす」

お母さんに言われてかまわないけど、夕奈までとは……
はあ、穴を掘つて埋まりたくなる……

……

「出来ましたよ」

「の15分間ずっとお腹を押さえ続けて、なんとか収まるようだ。
そうじやないと、おそらく晩ご飯が出来上がるまでずっと鳴り続けるだろー。」

「ばんばん～ばんばん～」

夕奈がうれしそうに歌つている同時に、僕はもう席について待つている。

「いただきます」

そう言つたとたん、僕はもうハンバーグを摘んで、自分の皿に置いた。

よだれが垂れそとに、ハンバーグを口に入れたい直前に、お母さんが突っ込んだ

「ほら、食べる、先に女の子の分にも取つてもうつて」

「……」

夕奈は何も言わなかつた、ただその場に座つて、僕を待つている
かのようにぼつとしている。

なんだよ、自分で取れるのに、なんで僕夕奈にハンバーグを取つてもらわなければならない？

しかたなく、僕は箸でもう一枚のハンバーグを摘んで、夕奈の皿に置いた。

「あ、あつがとつ」

夕奈はぎこちなく、頷いた。

「さて、あらためて、いただきます」

「いただきます」

「じゅわっさまでした」

夕奈が礼儀正しく会釈した。

「いいえ、こちらこそ」

「また遊びに着てくださいね」

お母さんがおじぎで返した。

「おやすみなさい」

僕も適当に挨拶をした。

「今日はいろいろありがとうございました。本当に助かりました。では、お先に失礼します」

「十夜ちゃん」

「何？　お母さん」

「ちゃんと家まで送つてあげて」

「えええー」

隣の家に住んでいるのに……そこまでしなくても

「だめよ、十夜ちゃん、ちゃんと女の子を目的地まで送り届けないと」

「はー、分かつた」

「ぐすくす」

僕はしづしづとして、夕奈と一緒に出了た。

「今日はいろいろありがとうございます」

「い、いいえ、こちらこそ……」

「そういえば、お母さんはおむつじりこですね……」

「そうか……あはは……」

何を答えるといいのか分からなくて、適当に笑って話をさらした。だめだ。周囲の雰囲気が重くなってきた。何か話さないと……

「あのう

「あのう

「あのう

僕と夕奈が一緒に話した。

「えつと、そっちは女の子だから、わざわざいりあわせ

「いいえ、十夜くんが先に言い出したから、おそれてついで

なんだろう、雰囲気がさらに重くなつた……

僕がこの重たい雰囲気を打破しようとした。

「これからどう呼べばいい? タ奈ちゃんが恥ずかしいと思つたら

「……」

「いいえ、恥ずかしくもなんともないです、このまま続けていつも呼ばれていいです」

「んじゅ、これからもタ奈けやんつて呼ぶこととするわ

「では、おやすみなさい」

「おやすみなさい

「まず、一件落着。とりあえず、家に帰るつか……

「ねえ、十夜ちゃん、あの子をどう連れつ?

「? ? ?

「…………

僕はしつらばくれる。だが、顔を赤らめて、すべバレバレになつた。

「ほら、照れてる

「照れてないよ、もつお母さん、からかわないでよ

「他の誰にもいないのに、十夜ちゃん、素直じゃないの

「僕は何も答えられなかつた。

「もう寝る、おやすみ

「…………

あえてお母さんと口喧嘩するより、僕はその場から離れることにした。

いろいろと疲れたから、僕はパタンとベッドに入った。でもなかなか眠れない。一 日中で起つたことがずっと想つていて、身体がろくに休めない。

僕はベッドの中で「ロロロ」と、いつ寝つたかはもう自分さえも知らなかつた。

翌日、僕はいつも通りに、朝早く起きた。早起きは二文の得ではなく、学校に行かなければならなことだ……

「おはよ、お母さん」

「おはよ、十夜ちゃん、今日も早いわね……朝ごはんの用意は出来たから」

「はい」

僕は洗面所に向かつて、顔を洗つた。

居間へ向かつて、お母さんはもう座つて僕を待つてゐる。

「それでは、せーの」

「いっただきまーす」

僕たちはハイテンションで叫んだ後、朝ごはんを食べ始める。テーブルにおいてあるのは、ソーセージ1本と田玉焼き2個……あれ？ 捩つてない

いや待て、これをビビり見てもおかしいだろ……

ソーセージが1本、田玉焼きが2個。何をほのめかしているのだろう。

なんだよ、この朝ごはんは……

その隣に、ミルクもある。もしかして、これも他の意味が潜んでいるのだろう？

僕はちよつと田線がお母さんに移る。

「お母さん」

「何？」

「どうして田玉焼きは2個もあるの？」「ソーセージは一つしかない？」

？

「それはね、仕様ですわ」

「……」

仕様つて……

からかわれたような気がする。

「テストで満点を取つて欲しいから、こうこうふうに作ったの」
僕がテストで満点を取つて欲しいといふことなのかわからぬけど、まことにかく、気持ちだけ受け取つておくとしきり……

「むつ」

僕はわざと怒つてこるみゆき、お母さんを睨んでみる。

「あらら、それは嘘だ、ちゅうびソーヤージが一つしかないからね、あは、あはは……」

「じゃ、ミルクは？ 今までミルクを買つたことないのに……」

「それはね、十夜ちゃんが元気に育てるために買つたの」

お母さんはやつたけど、確かに僕の胸を見て話してくれている……

男つて、胸の大きさなどいでもいいだひつ。

「かあさん！」

「はい、冗談ははは」と終わりへ

「……」

そんなお茶目な性格をやめてください、むつ子供じやあるまいし

……

「十夜ちゃんが小さい頃から小柄だから、ミルクを飲ませて、もつともつと背が伸びるかなあとと思って、ミルクを買つただけだ、別に他の意味はないから、お母さんのこと、怒らないで……」

お母さんが泣きそうな顔で僕を見つめている。

「僕は、怒つてないよ、お母さんはお母さんだから……」

だから、かわいがつてあげるとからかうは違うだろ？ いつも僕をからかってばっかりいるけど、決して嫌いわけじゃない。でも、なぜいつも僕をからかうか分からぬ。

僕のことを好きだからこそからかつてくれる？ それとも……

気遣つて欲しいからこそからかつてくる？

確かに、僕は学校に行つたら、家はお母さんしかいない。毎日

「マでも、隣同士とのムダ話でも、こすれ飽きたらね。

お母さんは気を取り直すため、ちょっと洗面所行って来た。

「さあさあ、早く朝ごはん食べなさい、そうじやないと、学校間に合わなこよ

「うそ」

しばらぐすると、朝ごはんを食べて、ミルクも飲み干したあと、僕はバッグを持って、学校への準備をする。

「まあ、とにかく、朝ごはん食べ終わつたから、学校行つてくる……」

「行つてらつしゃい、氣をつけてね」

お互に手を振りながら、僕は家を出て行つた。その時……

夕奈とばつたり会つた。

「夕奈ちゃんじゃない？ おはよっ」

「おはようございます」

今日はワンドピースじゃなくて、普段着を着ている。さわやかな気分を感じられる。頭に2つのリボンをつけている。そんな夕奈でも可愛いと思われる。

夕奈は引っ越しばかりだから、学校は行かなくて済んだつてこと。

多分今日は一人であちこち回るだろう。

「十夜くん、朝早いですね、これからどこへ行きますか？」

「学校だよ、僕は一応学生だから……」

「いいなあ、学校、あたしも学校行きたいです」

「この町に住み着いたら一緒に行こう」

「うん」

「もうそろそろ時間だから、さきに行つてくる、またね

「あたしはちよつとこの辺を見て回るから、じゃね」

軽く挨拶したら、学校へと向かつた。

いつか夕奈と一緒に学校に行ける日を期待している。

キー・コン・カーノン……

「ゼえ、ゼえ、間に合つた……」

「おまえ、いつも早いのに、今日はめずらしくじやねえか?」「僕に話しかけてくるのは、僕のクラスメイトである、浩平だ。」

「今日はいろいろ事情があつたから」

「もしかして……ちくしょう」

浩平の態度ががらりと変わる。

「おい、いきなりなんだよ、おまえ」

「俺を待たずに、先走って彼女が出来たとは、許せない……」

態度が豹変した浩平は、僕を見て怒鳴つてみせる。

普段他の生徒と話している生徒も少し視線が集まってきた、こりゃまずい。

「おい、ちょっと……僕は何も言つてないから、勝手に勘違いしないで」

「じゃ、おまえが無罪だと証明してくれ」

浩平が開き直った。突然証明してくれって言われてもしょうがない……そもそも彼女がいないのに、それに、夕奈は知り合つたばかりの友達だけど。無理やり濡れ衣を着せるなんて、今日はいやな予感がする……

「何をすればいい?」

「ここでじつとしてろ、動くな!」

もはや喧嘩沙汰になつたので、他の学生の視線もこいつに注目していく。

浩平が急に顔が寄つてくる。

「おい、何してる? 僕はガチホモじゃない……」

「うん、こつちは異常なし、次」

とても小さな声で言つてゐるけど、僕がはつきり聞き取れる。

「お、おい、ちょっと待て、そこ、そこは……」

「のバカ、一体何をチェックしたいんだろう、早く終わらせてくれ、それとも、誰か助けてくれ……」

浩平がまた近づいてくる。

でも、今回はちょっと髪の方に寄る。

「う~ん

僕の髪に何がついている?

「う~ん

浩平はさらに、僕の頭を嗅ぐ。

「う~ん

「あれ? 一人ともここに何してる? とくにあんた、他人の頭を嗅ぐのはやめなさいよ、ヘンタイか?」

委員長だ。 僕の助け舟してくれ。 もう我慢できない。

それでも、浩平はまったく委員長の言葉を無視して、さらに手を出して、 僕の頭を探ろうとする。

「いいかげんに……」

「あつた!」

「!?

僕の頭に、何があつた?

「頭皮だ! ! !」

「おまえアホだろ? いきなり大声で出すな!」

確かに、昨日はシャワーをせずにそのままベッドについたせいで、
頭皮があつても無理は無い。それにしてもおおっぴらに言わないで
欲しい。

だが、あいつがずけずけと言つちやつた……

「あはは、きたな~い」

笑い声がちらほらと聞こえてくる。

クラス全員に笑わないだけでよかつた、むしろ笑つてない人も頭
皮があつたのかな、と僕は疑っている。それはどうでもいい。

「おまえら、さつきから騒がしいぞ、外にいても聞こえる、早く席
に着け」

僕たちはすかさず席に戻る。

「起立」

「礼

「着席」

委員長って大変だな、毎日何回もその話を言わないといけない。
僕のため息をつくと同時に、授業が始まつた。

午前中の授業が終わる前の5分。

クラスの皆は待ちかねている、そうだ、食堂だ。

食堂という神聖な場所は、昼となると、必ず戦場となる。飢え死に間際の人にとって、この戦闘に負けると、午後の授業はかならず倒れるに間違いない。

なので、その人たちは勿論他人より一歩早く戦場へたどり着けるために準備しておく。勝ち抜けた人は、美味しい昼ごはんを堪能できる反面、遅れて行く人は、皆が欲しくないものしか買えなくなる。さらに一番まずいパンまで売り切ってしまう可能性もある。

それが、僕が通っている学校のある残酷な現実だ。

だから、クラスの人はチャイムが鳴る瞬間を狙つて、一気に食堂を走ろうとした。

キーコン→カーコン

「きりっ」

「あつ、おい、ちょっと、授業はまだ終わってないぞ……」

挨拶を無視して、そのまま食堂へ走ろうとする人は僕だけじゃない、浩平と他三名だ。

この挨拶を無視しただけで、先頭の列に並べる。

「やれやれ、毎日もそうだから、もう慣れた……」

「先生……」

委員長は無言のまま、先生を見ている。

一方、僕たちが他のクラスの皆に負けないで、ひたすら食堂へ走り続いている。

かえつて、弁当を持ってきた生徒は、各自に弁当を取り出して、机を囲んで楽しく昼ごはんを食べる。

「今日は絶対やきそばパンを手に入れる!」

「それはこっちの台詞だ!」

「させるもんか」

同じクラスで抜け出した学生も負けないで叫んだ。
やつと階段が見える、こここの階段から降りると、食堂がすぐ側にある。よし、負けないと。

降りる前に、階段の隣にあるクラスのドアが急に開いて、誰かバナナの皮を投げてすぐ閉めた。

「うわっ、何これ？ 十夜ジャンプ～」

僕がバナナの皮を気づいて、それを踏む前に飛び跳ねてみ」とに避けた。

「なんていきなり飛び跳ねてる？ おまえ」

「うわあああ」

僕の視線に遮られて、地面を見えないせいで、浩平がバナナの皮を気にせずそのまま踏んじゃった……

そして、かれいに滑った。

しかし、浩平の後ろに走った他の三人は、助けもしないで、そのまま階段へと向かった。

理由は言つまでもない。

結局、浩平が自ら立ち上がりつて、ようやく食堂に着いたが……
やきそばパン売り切れた……

「……」

残っていたのは、コッペパンしかない。

「ちくしょう、誰がこんないたずらをしやがって」

自分の無力さに対して、一人で呟いている浩平を不憫に思つ……

でも、僕はあいつを見捨てていない、前列に割り込んで、やきそばパン一個も買った僕は、へこんでいる浩平に向かつて、救いの手を差し伸べた。

「ほら、おまえの分だ、遠慮なく食べて」

「あ、ありがとう、おまえはサイコーだ！！」

「まあ、大したことないけど……」

突然浩平が僕をギュッと抱きしめられて、何もできなかつた。

「ありがとうおおー、
漢の友情に万歳！」

「やめろ、恥ずかしいって」

他愛のない話を續きながら、僕たちはその戦利品を食べた。

- 1 -

「起立、礼、さようなら」

委員長の号令とともに、今田の授業が終わった。

セーと終わーた もとと 今ではケーせん行く?「

とが目的だと分かっている。

「悪いけど、今田は行きたくない……」「

僕はあっさりと拒絕した。

なんたよ?
行かないのか?
キレイな女の子かい? はいいるの

「なんでそう思つてゐる？」 女の子なら、学校でもいっぱいいるけ

僕は反論した。

「オトコの直感だ、ぜつたい間違いない！」

意地を張つて言つてくれる。

たまには、ケーセンに言って『気晴らしにしても悪くないから、僕は浩平と一緒にゲーセンに行くことにした。

—

遠くから、女の子声が聞こえる。

h h h h h
S S

「やの声は次第に大きくなる

女の子は地団駄を踏む。

卷之三

どこかで聞いたことのある声……

「はあ、これで10回かな、なかなか取れない……ああもう」
「どうやら10回でもつき込んだようだ。

ぱつと見だけで、その人が夕奈だと分かった。しかし、声をかけようが、かけまいが迷っている。

声をかけたら、絶対あいつに誤解される。

でも、声をかけなかつたら、なんだか悪い気がする……

「おまえ、何を考えてる？」

「なつ、なんでもない……」

やつぱり声をかけよつ、夕奈がかわいそうだし、どうせ隣に住んでこるお隣同士だから、あいつが理解してくれるだろ？……

「よつ、ほんこひば」

「あれ？ あつ、ほんこひば、十夜くん、こんなところに会えるなんて、奇遇ですね」

「と、十夜くんって呼んだぞ、おまえほんこひば……へへ、へやはじいいい」

浩平はこいつの間にか悲鳴を上げる。

悪寒がする、そろそろ説明しないと。

「ちよつと紹介する、この人は僕の隣に引っ越したばかりの夕奈、そして、こいつは僕の友達、浩平」

「他人のことを紹介するときはこいつって言つたなつづーのー、チキ

ショウ」

「こんだけは、はじめまして、夕奈とこーます。よろしくおねがいします」

ワンピースと違つて、裾はないから掴めない。普段着でありながらも、ちやんと身体を低くして挨拶をする。

「あつ、どうも、こ、こ、浩平です、よろしくへ

かなり緊張した様子。そもそもゲーセンに行って、ナンパしようしたいのに、おまえはガチガチに緊張してどうするんだ……」「十夜くんほっこりで何をしますか？」

「たまには友達と一緒にゲーセンに行こうかなと思つて、ここに来てたけど、夕奈ちゃんは町を見て回つてるじゃない？」

「うん、確かにそうですけど、ゲームセンターに通りかかつて、ちよつとしてみたいから、しばらくここにいました。あたし、ゲームセンターに行つたことありませんから」

「ゲーセンも行つたことないのか？ 一体昔夕奈はどこに住んでいるのだろう……」

浩平も側にいるから、聞かない方がいい……

「そして、この大きな機械の中のぬいぐるみが欲しいから、すこしして見たけど、もう十回も失敗しました、しくしく」

「どれどれ？ 僕もやらせてみる？」

夕奈が指で指している機械のなかに、いっぱいのぬいぐるみが入つていて、どれが欲しいかわからない。

「どのぬいぐるみがほしい？」

「えっと、そこのウサギが欲しいです」

UF-Oキヤツチャーに入つていてるウサギのサイズは大きいでもなく、小さいでもなく、夕奈の両手で抱きしめられるぐらいのサイズだ。運がよければ、あまりお金をかからずに取れると思つ。

1発目はちょっとキヤツチャーをテストする、どこまで届けるか、クレーンの力をどこまで入るか……それを把握しないと、かなり取りにくい。

ちよつとウサギの腰の部分を狙つて見ると、クレーンがちゃんと締まつてないせいで、取り上げることなく、そのままクレーンが戻つた。

「これで100円……」

「次、2発目。」

今回はちよつと暴力的に、片方のアームを頭に、もう片方のアームを下半身に止める。そして、「押す」のボタンを押した。

クレーンが徐々に落下した、しかし、片方のアームが頭に届いているけど、もう片方のアームは何も掴めないまま戻つた……

「この方法もダメか……」

夕奈ははらはらとしながら僕を見ている。

なかなか簡単じゃない……UFOキヤツチャーツというものは……
10秒もなく、100円玉が次から次へとそのまま水の中に沈むとなる。

次、3発目。

今回は縦も横も狙わないで、斜から狙つことにした。

「押す」のボタンを押して、クレーンが落下した。しかし、今はちゃんとウサギを掴んだ。

「そうだ、この調子で行け!」

取り上げたウサギが、ゆっくりじょとの位置に戻つていぐ、そして、ウサギが落下した。

「おめでとう」のような音楽が流れるとともに、僕はそのウサギを取つて、夕奈に渡した。

「すげえ、たかが300円で景品を取れるつー……俺なら無理かもしれん」

浩平が嘆いたまま、僕を見つめている。

「はい、これを上げる……」

僕はウサギを取つて、夕奈に渡す。

「本当ですか？ ありがとうございます」

「えつと、えつと」

夕奈がコインケースを取り出して、何かを探しているようだ。

「はい、300円です」

「??？」

僕はわけが分からずにきょとんとしている。

「さつき十夜くんが使つた分です、それを返します

「別に返さなくてもいいけど……」

上げるまで言つて、僕はしかたなく夕奈の手から300円をもひつた。

「ありがとうございます、大切にします

「俺にも教えてくれない？」UFOキャッチャーのコツを
そんな浩平は阿諛追従ぶりに見える。そのコツを使ってナンパし
たいならほかをあたつてくれ。

「なんでおまえに教えてないといけない？」
「ちえつ、けち

「くすくす」

浩平の文句を聞かされる上に、夕奈が笑つてくれる。
「もういいから、一人ともからかわないで」
「とにかく、一緒に帰りましょうか？」

「うん」

僕たちはゲーセンから出た。

たわいのない話をしながら、帰路に着く。
「次の交差点で俺は右へ曲がるから」

「僕たちは左だ」

つまり、別れの時間だ。

「今日はいろいろ楽しかったです。ありがとうございました」

「いいえ、こちらこそ、また会おう」

「何もしてないくせに……」

「またね」

あつとこう間に、僕たちは家についた。

「ぬいぐるみ、ありがとうございました」

「いえいえ、別に大したことないから……」

「あたしはそう思いません。これが、これが、十夜くんからのフレ
ゼントですか？」

夕奈は恥ずかしそうに顔を赤らめて言つ。

そう言わると、むしろこっちの方が恥ずかしい……

「あのう、ずっと聞きたいことがあるんだけど」

「何を聞きたいですか？」

「今日ゲーセンにいたとき、夕奈ちゃんはゲーセンに行つたことな
いって言つたけど、夕奈ちゃんは一体どこから来た？」

「……」

あまりにも唐突すぎて、夕奈がすぐ答えられなくて、ぼおっとしているままだった。

「うん、あたしは、田舎に生まれて育てられました」「なるほど、早く言つてくれれば良かったのに……別に恥ずかしいことはないと思つけど」

「田舎で生まれ育つた子は、それなりの悩みを抱えているから。同じく、都市で生まれ育つた子も、それなりの悩みを抱えているから。だから、それぐらいのことを気にしなくてもいいよ」

「でも、あたしはたくさんのこととも知らないのです。ゲームセンタ一まで行つたことありませんし……」

「それを気にすることはない」

「分かりました、ありがとうございます」

人間は、限られた時間の中に、すべての知識を頭に入ることができない。自分にとって、役に立てる知識を選んで、覚えて、身につけることこそ、一番大事なことだ。

「ところでさ、夕奈」

「はい、何？」

「田舎に住んでるって言つたのに、なぜ上京した？」

好奇心は猫を殺すと分かつていても、僕は思わず聞いてしまう。「えつと、私は人を探しています、大切な人を探しています」

「大切な人か？ その人はどこにいる？」

「あたしもはつきりわかりません……しばらく、あたしのおばさんの家に住んでいますから」

それにもしても、分かつてないのに一人で上京するのか？ そんな夕奈の勇氣に感心する。

「ただ、その人がなんかずっとあたしの隣にいるような気がします」「でも、その……とは……と……や……ない……し」

最後の言葉が、声が小さすぎて、あまり聞き取れなかつた。

「夕奈ちゃん、最後に何を言つた？ 僕、ちゃんと聞き取れない」

「なんでもない、なんでもない、えへへ」
夕奈が舌をぺろりと出して、『まかした。

「とにかく、また明日ね、おやすみなさい」

「またね、おやすみ」

僕は自分の家に戻った。

「おかえりなさい、私の大好きな十夜ちゃん」

お母さんが大きな声で叫びながら、僕に抱きつこうとした。

「おっ」

「あわわわわ」

その一瞬間で、僕は際どいところでかわした、あぶねえ……

「かあさん！ そんな気持ち悪い呼び方をやめてくれない？」

「だつて、好きだからしかたないもん」

「……」

なんだよ、そんな理由なんか僕を抱きしめたくなるつて……

「はいはい、遊ばない、遊ばない」

「僕をおもひやとして遊んでいるのがお母さんじゃない？」

「ごめんね」

「しようがないなあ」

お茶目な性格はいつも直せるだろう。

「晩ご飯の支度をするから、先にシャワーを浴びて待ってね」

「うん」

僕はすたすたと歩いて、脱衣所へ向かう。

上着を脱いで、鏡の前に、生まれたままの自分の姿を見ている。一
体なにをしているのだろう……

僕は胸に手を当てる。それは、ちらちらと青く光っている円型の
首飾りだ。

「一体なんでこのペンダントが光っているのだらうへ

「後でお母さんに聞いひへ……」

……

シャワーを浴びて、僕はトレーディを見ながら、晩ご飯を待っている。

「はい、出来たよ」

「今日はチャーハンだね」

「うめんね、十夜ちゃん、今田は買物を済めりやつたから、それで……」

忘れたらしようがない。たまにチャーハンを食つても悪くない……
「いいよ、別に謝らなくても……お母さんが作つてくれたら、何でも美味しいに決まつてゐる」

僕はお世辞を言つ。

「口だけが甘いんだね、十夜ちゃんつてば」

また恥ずかしがられる言葉を口から出でてゐる……

「とにかく、いただきます」

「いただきます」

レタスのさくらんとした感じと、調味料と混ぜ切つたお肉の味は、じんわりと口の中広がつてゐる。レタスチャーハンつまい……」の言ひ出しが止みなかつた。

しばらべると、チャーハンを平らげた。

「うわあつわまでした」

「おわあつわまでした」

「お母さん、今日はお皿洗いを手伝つてあげる

「あら、珍しいわね、じゃ、お願ひします」

お母さんは手袋を渡して、テレビの前に座つて見てゐる。

「あれ？　お母さん、一緒に洗わないじゃない？」

「手伝つてあげるつて言つてゐるでしょ？　では、全部手伝つてくれ

るよね？」

「……」

アシスタンントとしてやりたい俺は、まるでバカみたい。結局、お皿洗いを全部一人でやるハメになつた。たまにはお母さんの力になつても悪くないから、よしとするか……

10分後、お皿洗いが終わった。

「お母さん、終わつたよ」

「おつかれさまでした」

僕はお母さんのところに行つて、一緒にテレビを見て笑っていた。

「面白かった」

「そうだね」

「さてと、寝ようか?」

「うん」

そのあと、僕はすこし今日の授業内容を復習することにした。午後1~1時くらい、ちょっと早いけど。僕たちはこの時間で寝る。パソコンを持つてないし、出かけることもあまり好きじゃないから。いつも早く寝ることにする。

お母さんも他の趣味とか持つてないから、いつも僕と同じく夜早く寝ることにする。

「では、おやすみなさい」

「おやすみ」

⋮

僕はベッドに寝転がつている。なかなか眠れない。

「うん、あたしは、田舎に生まれて育てられました……」

夕奈の言葉につづくと考えている。

田舎ものなら、どうしてわざと上京して、人を探すのだろう。しかも、その人はどこかにいることさえ分からなかと言つていた……このままじや、見つかる可能性はかなり低いじやない?

夕奈を助けたい。

夕奈のチカラになりたい。

一体、僕はどうすればいい？

今さら考えてもしかたないので、寝よう……

気がつくと、もう次の日の朝だった。

カーテンが開けられ、太陽の日差しが浴びている。

その光を耐え切れずに、僕は目を擦る。

「おはよう、十夜ちゃん、朝だよ、起きてください」

「後五分、五分でいいから」

「ダメだよ、起きないと、遅刻するよ」

「じゃ、三分、三分でもいいから」

「それもダメ、もう起きないと、取つておきなメニューを準備してあげる」

取つておきなメニューを聞くと、僕はすぐ起きあがつた。それは何だろうか分からぬけど、なんだか恐ろしいものに違いないから。歯を磨いて、顔を洗って、僕は居間へ向かう。

「おはよー、お母さん」

「おはよう、十夜ちゃん」

「おお、今日はパンにミルクだね」

「シンプル・イズ・ビューティー、うふふ」

お母さん分からない言葉を発した。とにかく、朝ごはんを食べよう……

朝は牛乳から、つと……

僕はガラスを持ち上げて、グッと牛乳を飲む……

「「ほー」ほ」

牛乳を飲む瞬間で、僕は吐いた……

「あらあら、十夜ちゃん、きたないね」

僕は挫折したように身体を前に屈める……

騙された、まさか牛乳の中にコショウを入れるとは思わなかつた。

「あら、ちょっとやりすぎたのかしら?」

「……」

ほんのちょっとだけのイタズラなのに、でも、僕はすこしでも傷ついた。

お願いだから、もうやめてくれ。

「もういい、学校行くから、じや……」

「……」

「ゴメン」

お母さんが無力のまま、一人で地面に座つて泣いている。

「えぐつ、うわあ

だが、僕はお母さんを気にかけないで、そのまま学校へ行つた。

「おはよう

「なんだよ、おまえ、今日もギリギリじゃねえか?」

「いろいろあつてから、遅刻しなくて何よりだ」

「昨日はどう?」

「なにが?」

僕はきょとんとしている。

「他に誰かいる? もちろん夕奈のことだ」

「僕と夕奈の間に何も起こつてないから、勘違いしないで」

「おまえ、テレてる。やっぱり何があった?」

浩平はさらに聞いて詰めてくる。

「誰が夕奈だ?」

その声は浩平の声じゃなく、どこかで聞いたことのある声……

まづい、先生だ……

「それはえつと、まあ……」

「あははは」

クラスの中に、また笑い声が絶え間なく起つた。

はああ、また皆さんに笑われる的となつた……

「席に着け、そして、静かにしろ」

「起立、礼、着席」

「これからは数学の授業だ、その前、さきに昨日勉強したことを行
習するぞ」

「浩平」

「俺？」

先生の指で指しているのは、さつき騒ぎを起こした張本人である
浩平だ。

「球体の体積を答える」

「……」

どうやらあいつが分からぬようだ、あいつに囁きでヒントでも
あげよう。

しつつ

「そこ！ 声を出すなら今日掃除当番だ」

「……」

先生はすかさず大声で僕を警戒させる。

「ごめん、助けて上げられなかつた、一人で頑張れよ……
えつと、まあ、あのう、ちょっと」

「あつた、思い出した」

「じゃ、答えてみて……復習だから、間違つても何も怒らないぞ」

先生の言葉が疑わしく見える。

「4 × 3 ² × 2」

浩平が答えた3秒以内に、先生がチョークを浩平の頭のてっぺん
に投げる。

「痛てつ、先生、怒らないって言つてたのに」

「でも、チョークを投げないなんか言つてない……」

「はい、次はおまえ」

「……」

「つちまで巻き込まれる。」

「同じ問題だ、答えて」

「4／3 r & amp; sup3・」

「正解

よかつた、昨日寝る前にちりつと教科書を見た甲斐があった……
「浩平、おまえが今日の掃除当番だ」

「あはは」

またもクラスの皆が笑い出した。もちろん僕は笑わなかつた、むしろ笑えなかつた。

放課後……

「じゃね」

僕は用事にかこつけて、逃げようとした。

「ちょ、ちょっと、おまえ、俺たちは友達だろ?」

「うん、そうだよ」

「だから、友達を見捨てるわけないだろ?」

「うん、そうだよ」

「じゃ、俺を手伝って、一緒に掃除しな」

「それは無理

「なんでだよ?」

「罰があたるのはおまえだけだから、僕が手伝う義務はないから

「チ、チクシヨ……」

あたりまえのことと言つてゐるから、浩平は反論できなかつた。

「とにかく、じゃね

「……」

浩平を裏切つたようで後ろめたいけど、ゴメン。

僕は教室を出る。用事つていつのは、夕奈のどこに行くに違ひない。

校門を出る時、ある人影が見える、その先には、夕奈が立つている。

ずっと僕のこと待つていたらしい。

「ほんにちは」

「ほんにちは、奇遇ですね

「夕奈ちゃんはここに何してる?」「

「ちょうどここに寄つてきて、十夜くんがこの学校に通つているのではないかなと思って、ここで待つてみました」
「すばり、僕のことを待つてたのか……」

「とにかく、一緒に帰りましょう」

「うん」

僕たちは帰り道を歩いていく。

「夕奈ちゃん、一つ聞きたいことがあるんだ」

「何を聞きたいですか? 十夜くん」

「この前、夕奈ちゃんが言つたけど、大切な人を探しているって」

「うん、言いましたよ」

僕はさらに詳しいこと聞く。

「じゃ、その人が、どこにいるかさえわからないのに、どうしてわざと上京したのか?」

前も同じ問題を聞いたような気がする。でも、そのとき、夕奈ははつきり答えてくれなかつた。

「それは、あたし自身もわかりません……」

「……」

「なんだかその人が東京にいると思つていますから、つい……」「女の子の勘、ですよね、えへへ」

「……」

「こんなことは直感に頼っちゃだめだよ。

このままじゃいつまで経つてもその人を見つけられないと思う。
僕は何をすればいい?

夕奈のチカラになりたい……

あつ、そうだ。僕も手伝つてあげたら、探す時間が半減できる。
そして、僕はそう言つた。

「夕奈ちゃん、よかつたら、僕と一緒に探したうどい思ひっ、夕奈ちゃんのチカラになりたい」

「一人で探すより、二人で探す方が早いと思わない?」

「話はそうですが……」

「どうやら納得がいかないようだ。

「その人は、一度しか見たことありませんから、顔もよく覚えていません」

「……」

「どこにいるか知らず、顔さえ分からず、どうみても無理としか言えない……」

「あたしが分かっている限り教えてあげますから」

「ああ」

僕はメモ用紙を手にとつて、夕奈ちゃんが言つとおりに書き写す。
「その人が、昔に、私がどこかで見かけました」「あたしが知らない場所、行つたこともない場所で会いました」「としさは大抵あたしと同じく、たぶん十夜くんのよつな中学生だと思ひます」

昔、知らない場所い、中学生……

僕はいちいち夕奈が言つたことを書き写す。

「他に分かっている手がかりとかある？」

「もうありません、すみません……」

「謝ることなつて」

「とにかく、一緒に帰ろう」

「うん！」

別の話をしながら、帰路につく。

「あ、あのー、十夜くん」

「ん？ どうした？」

「て、手をつないでもいい？」

「ちょっと待つて……手を繋ぐ？ ロロロの準備がまだだけど……」

「そ、それはちょっと、なんというか……別にダメというわけじゃないけど、ああもう、何を言つてるんだ、僕は……」

女の子の前にじどりもじどりしてくる、恥ずかしすぎて、穴があつたら埋まりなくなる。

「もしかして、だ、ダメですか？」

「いやつ、と、とにかく、ほら」

僕は自ら手を差し出す。やっぱりそつしないと、オトコマエじやないかなあ、それに、女の子から手を差し出してくれるのもいやだし……

夕奈も自然に五本の指を広げて、僕の指と絡む。やわらかい、女の子の手がこんなにやわらかいと初めて分かった。小さい頃、お母さんと手を繋いだこともあるけど、それとは全然違う感触だった。うら若き少女が自ら手を伸ばして、繋いでくれと言つて、手を伸ばさない男はいるわけない。

手を繋いでいるおかげで、夕奈との距離もさらに近づいていく。もしかして、これが恋する人の気持ち？ 恋の予感に胸がときめく。突然、強風が起こり、夕奈のスカートがめくられる。

ピンク色のイチゴの絵柄がはっきり見える。これは避けられないすばらしい罠。いい目の保養だ。

夕奈が一生懸命自分のスカートを抑えるけど、なかなか風に勝てない。

初めて自然の力の凄さを感じた。ありがと、ウインド。

「ひやつ、いやあ、み、見ないで

「ゴメン」

僕は思わずそっぽを向く。

ほんのちょっとだけでも覗いてみたい。

このスカートの中の神秘な花園を覗いてみたい。

その気持ちは、たぶん、他の男の子も同じだと思っている。僕も思春期に入るのかな。

しかし、なんとか僕は理性を抑えて、覗かなかつた。

この抽選であったる確率より低く、ごく大切なチャンスを逃した僕は、すこしでも後悔している。

とはいえ、なぜか男がスカートの中のパンツを見たら興奮する理由がなんとなく分かつた。

色っぽいな、僕は。

夕奈の様子を確認してみる。

「風がもう止まつたけど、大丈夫?」

「もう大丈夫です、心配してくれて、ありがとうございます。ただ、髪が乱れてしまいました……」

夕奈が髪をすこしいじって、シャンプーの香りが鼻に漂わせてくる。

髪をいじるたびに、ラベンダー味の香りがどんどん増えてきた。ふと昔見た夢を思い出した。

自分が夜の大草原に座っている。確かに、周囲が紫色で、おそらくそれもラベンダーだったのかな。

もしかして、夢の中の人って、夕奈と何かのつながりがある? やっぱり考えすぎ。そんな根拠のない勘ぐりをやめたほうがいい。ねがわくば、そうでないでほしい……

第3話（前書き）

「うふえつちシーン」あり。
でも、R18の程度ではありません。
ご注意ください。

空が茜色に染まり、太陽もだんだんおやすみなをこと言つより、入り日がどんどん空から沈んでいく。

僕たちの知らない場所に行く……

「空が暗くなつてくるから、早に「ひたすら」帰らつか？」

「うん」

だが、家に着く前に、夜がさきに来てしまつた。今日ははいつもより早く日が暮れる、一体何が起つるのだろう?

ようやく、家の近くにたどり着いた。

「今日はいろいろ楽しかつたです、あの風がなかつたら、ね」

「あはは

思わず笑つてしまつた。

「もう、からかうんじやありません、怒りますよ」

「怒らないで、また強い風があつたら、僕が夕奈ちやんの前に立て風を受け止めてやる」

「その気持ち、ありがとう」

今度またこんなチャンスがあつたら、おそらく、僕が覗くかもしれない。理性に勝つのはなかなか簡単じやない。ふたたび勝てる自信はまずない。

不意に思いがけないことが起つた。

空が暗いせいか、僕たちはトラックが「ひたすら」近づいてくる」とがまつたく気づいてなかつた。

どこからクラクションの声が聞こえる。

「あぶないっ……」

僕はすぐ夕奈の身体を強く押す。そして、自分の身体を飛び跳ねて、トラックを避ける。

「バカヤロー、死にてえのか、このバカッブルめ、チキシヨー」

後ろからドライバーの罵声が聞こえる。しかし、トラックが勢いよ

く去ってしまった。

とにかく、僕たちは無事でよかったです。

「危なかった。夕奈ちゃん、怪我とかないのか？」

「大丈夫です、でも、ちょっと離してくれませんか？」

さつきのトライックをよける際に、いつのまにか身体が夕奈の上の
しかかっているか全然注意してなかつた。

「ああっ、『めん』めん、わざとじゃないから、許して

「いいですよ、十夜くん、もうちょっとだけ……」

夕奈が僕を誘惑しているのか？ やばい、このままだと僕には勝
ち目がない。

そこまでしてくれるなら、もしかして、夕奈が僕のことiga好き？

違う、ちがう、チガウ……そんなはずがない。

確かに、今の夕奈のそのなまなましい姿が僕より一十センチもな
い距離にいる。

僕が夕奈の顔を見つめている。

「十夜くん」

「はい？」

「あたしの顔、何かついてる？ そんなに田もそらさないであたし
を見ていますけど……」

夕奈はその透き通る水のような目で僕を見てくる。
もうだめだ、理性が北極まで飛ばされそう。

「ねえ、夕奈ちゃん」

「はい」

「ちょっと、キスしてもいい？」

「どうして？」

さきに僕のことを誘惑しようとするのに、今更どうしてって聞か
れるとこっちが困る。

「いや、ただ、キスしたいだけ……」

しぶしぶのうひ、言つちやいけない言葉を言つてしまつた

僕って最低だ。

「いいですよ、十夜くんなり……」

「じゃ、田を閉じて」

「どうして?」

「また聞かれる、今度はマジメに答えないと……
恥ずかしいと思わない? 田を開けたままにキスしたら
確かにそうですね、くすぐす」

夕奈が田を閉じる。

その瑞々しく、艶やかな唇は、僕の前に……
まるで、ハチミツがいっぱい入っている花が、蜂から採集を待ち
こがれているかのように。田を閉じて、ゆっくりと夕奈に近づいてくる。
僕も田を開じて、ゆっくりと夕奈に近づいてくる。

「ちゅっ」

「よつやく、僕と夕奈の唇が重なった。

何の味もしないくせに、なんだか甘いと感じられる。それに、ひ
らひらとしたからラベンダーの香りを漂わせて、なかなか離れたくない。

このままじやまざいと僕たちが氣づき、田の唇を離れた。

唇との間に、透明な橋のように、糸を引く。

これがキスだったのか? カえって自分に聞きたい……

「気持ちよかつた、夕奈ちゃんは」

「あたしも」

「とりあえず、ティッシュで拭かないと」

僕がポケットティッシュを取り出して、夕奈の唇を拭く。

そして、もう一枚取り出して、自分の唇も拭く。

だが、ここの中の不安、戸惑いが拭えない……

僕が、本当に夕奈のことを好きなのか? それとも、夕奈が僕のこと好きなのか? 僕さえ分からぬ。

どうすればいい?

僕は頭をポリポリとかく。

「どうしたのですか? 何がありましたか?」

「なんでもない」

暗闇の空が、急に雷が鳴る。

「ゴロゴロ……

「いやああ、怖い」

夕奈が思わず身体を寄つてくる。

僕はそのまま夕奈を抱きしめる。

「あたし、雷が大嫌いです」

夕奈の身体がぴくぴくと震えている。かなり怖がつているようだ
なあ。

「僕が側にいるから、大丈夫だよ」

「しくしく

「ゴロゴロ……

また雷が鳴る、びづやぢアメが降りそつだから、今の家に帰らな
いと……

「ゴロゴロ……

身体がぴりぴりとする、雷が近くに鳴つているせいだろう。

しかし、目の前に、信じられない光景が現れた。

熱を感じる、ありえない熱さ。それは人間から発するのではない。

さつきの雷が、夕奈に当たった……

側にいる僕は怪我しなかったのはおかしいけど、夕奈の身体もや
けどの傷など一切ない。

いつたいどういうこと?

僕は早速夕奈の調子を確かめる。

「夕奈ちゃん」

「……」

反応がない。

「うそだろ? 夕奈ちゃん、しつかりしない

僕は夕奈の身体を揺らす。

しかし夕奈がそれを気づかないよう、口をもじもじさせる、何
を言つていいのか分からぬ。

「アヴァアダケダヴラ、……」

「何を言つてゐる? 日本語でしゃべつてよ

「ヴォウズムウレーゼ、……」

まったく聞き入れてない、……

僕はちょっと夕奈の頬をつねつてみる。

「いたつ、あう」

「痛いよ……もう、十夜くんつてば、

意識が戻つたようだな、よかつた。

「夕奈ちゃん」

「ちょっと、何が起つましたか?」

僕は夕奈を抱きしめる。大切な宝物を手元から離さないよつと、……

「なんでもない、夕奈ちゃんを抱きしめたいだけだから」

「ああもう、十夜くんのおせっかちです、う

僕の顔を紅潮した。

「と、とにかく、ここはあぶないから、さつと帰らう」

「うん!」

家は見えるのに、なんだか遠くにあるような気がする。トライックに危うく跳ねられそうになつたり、雷が鳴つて、夕奈の意識が遠くいって、最後に戻つてきたりして、もうさんざんになつた。

もう帰らないと、また何が起こるか僕たちも分からない。

とうとう家に着いた。

「今日はいろいろがありましたけど、楽しかったです。とくに十夜くんと二人だけ、ですね、うふふ」

夕奈が頬を染めながら、自分の唇を人差し指で当てる。

「夕奈ちゃんがそこまで言つてくれると、こつちまで恥ずかしくなるから」

「確かに、それがあまかった……」

やつと僕の顔も赤らめた。

「とにかく、家に着いたら何よりだ、おやすみなさい」

僕は夕奈に手を左右に振つて挨拶をした。

突然夕奈の不意打ちを食らつて、僕の頬にキスをした。

「ちゅっ」

「おやすみなさい、十夜ちゃん、えへへ」

夕奈が舌をペロリと出して、くるりと顔を向けて自分の部屋に戻つた。

さてと、僕も戻ろう

……

「ただいま」

「おかえりなあ～」、どに行つたの？ 心配してたまらないよ、お

母さんは

「ちょっとハプニングがあつたから、帰りが遅くて、すみません」

「……」

お母さんばびくともしなかつた、僕をしかる氣もなかつた。

「いいんだよ、別に」

「十夜ちゃんが無事に帰れたらなによりだよね」

「汗びっしょりだから、早くシャワーを浴びてきなさい」

「うん」

僕は脱衣所においてある鏡の前に立つ。

そして、ちょっとだけ指で唇を当てる。

「甘い……」

ほんのりと甘い香りがまだ残つている。それが、うら若き乙女の唇の香りだ。

「いつかまたキスできるだらう」

自惚れる。

「十夜ちゃん、一人ぶつぶつして何を言つてゐるの？ 早くシャワーを済ませなさい」

「分かった」

まさか、さつき僕が言つた言葉が、全部お母さんに聞かれた？ 聞かれてもしかたがない

「まあ、いいつか」

「そういえば、今日の夕奈ちゃんがおかしい、変な言葉を言つたり、急に僕を攻められたり、一体何があつたのかな？」

夕奈の言葉を反芻する。今日は怪しい事件が立て続けに起つたから。夕奈が雷に当たつても怪我しなかつたり、急に変な言葉言つたり……さっぱり分からぬ。

ふくふく。

考え事が多いので、二つの間にか頭は水の中に入つてしまつ。

⋮⋮⋮

遠くからお母さんの声が聞こえる。

「いつまで浴びたいの？ 晩ご飯が冷めちやうよ」

「ぶはあ……」

危うく溺れるとこだつた……

呼んでくれてありがとひ、お母さん……

そして、僕たちは晩ご飯をした。

お皿洗いも済んだら、ちょっとテレビを見る
ちょうどこの時間が二コースの時間だ。

「次の二コースです……」

アナウンサーが今報道しているのは、あるドライバーが急にわけのわからぬ事故に巻き込んで死んだ二コースだ。見るも痛ましい事故現場に、大量の血が流れている、地面が一片の紅色の海に染まつているようだ。酷いありさまのようだ。

トランク高いスピードで壁にぶつかり、フロントガラスがひび割れた。その割れ目はさうにドライバーの頭にぶつかり、粉碎されて、一枚一枚の殺人武器となつて、容赦なくドライバーの体に刺した。そんな画面は、モザイクをかけても怖い。

「お母さん……これは、怖い」

「酷い……」

せめて、他の人に巻き込まれなくてよかつた、と思いたいけど。
こんな死体は、誰も見たくないだろ？ むしろ、そんな死に方は
誰も望ましくないと思う。

しかし、一体ドライバーはどういうふうに、こんな酷い目に遭つ
たのか、腑に落ちない。

もしかして、途中で病気が発作したせい、救いもなくてそのまま
死んだ？

ところが、それはありえない。病気だったら、そこまで血が流れる
わけがない……

一体どうしてだらう？

まあ、まだ中学生の僕には分かるまいと思つ……

「はあ、人生つて儂い（はかない）もんだね」

お母さんが呟く。

「十夜ちゃん、自分が好きなこと、やりたいことがあれば、迷わず
に先にやりなさいね、自分の能力以内のことだね」「
だからね、後悔しないように、自分ができることをする」

「……」

お母さんの言葉はよく分からない。でも、決していいことではない。

とにかく、生きていらぬうちにやらないと後悔するしがこつぱい
あるから、先にやりなさいってことかな……

今の私にとって、一番やりたいことは……

……

あつた。

「お母さん

「なに?」

「今日はさすがに疲れたから、先におやすみなさい」

「おやすみ」

「今の私にとって、一番やりたい」とは……寝ることだ。

ようやく日曜日が来た。

せっかくの休みだから、ハメをはずして遊ばないともつたいない。
朝ごはんを食べたら、僕は出かけようとする。

「いつらっしゃい、気をつけたまえ」

「うん、じゃ、行つてくる」

「へんなお姉ちゃんからのキャンティマーをもらわないでね」

「……」

普通は中年男性だろう。僕はシスコンじやあるまじ……
お母さんの言葉に対してなんだか悪寒がする。

「じゃ、行つてくる

「行つてらっしゃい」

僕は夕奈のところへ行く。

「一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
」

「誰ですか?」

「僕だ、これから一緒に出かけない?」

「いいですよ、ちょっと待つてください

「はい」

今の夕奈ちゃんは向をやつてこないのでありつつ、

5分後。

「おそい……」

返事がない。もしかして、夕奈に何があつたのか？

「開けるよ」

とんでもない光景だ。

夕奈が身体をピンク色のバスタオルを巻いて、左手がドライヤーを持って、右手が髪をいじりながら左手が持つていてるドライヤーで髪を乾かしている。

そのタオルは、うさぎの絵柄が描かれている。なんだか可愛いなあと思う。それに昨日とは違つて、今日はピーチ味のシャンプーを使つた夕奈は、意外にタオルと合つている。色といい、デザインといい、申し分ない。

「と、十夜くん？ ちょっと出でもらひませんか？」

「『』めん、わざとわけじやないかい」

「……」

また5分後……

「入つていいよ」

田の前に、ワンピースを着ていてる夕奈。髪型が三つ編みでもつと可愛く見える。特に化粧はしないけど、唇に似ていてる色の口紅を薄くつけて、つやつやとしている。パラソルを持つていたらパーフェクトと僕が思つていてる。

「きれい、まるで天使に見える」

「褒めてくれて、ありがとうございます」

夕奈が照れている間に、夕奈のおばさんが來た。

「あら、十夜ちゃんじゃない？」

「こんにちば、おばさん」

「ねえ、十夜ちゃん、この子は、私の姪の夕奈だ」

「おばさん、もう初対面ではないですよ」

夕奈に自己紹介をさせたいたと思つたとき、夕奈が口を挟んで阻止した。ナイシツツ「ミだ。」

「とりあえず、準備オッケー？」

「うん、オッケーです、行きましょう」

「どこ行くの？ もしかして、『トート』？」

「ええっ？」

「がーん。

一発で当てられた、さすが夕奈のおばさんだ。女のカンつて、やっぱり怖い。

ちょうど出かけようとした時。

「忘れ物がありました。えへへ」

その忘れ物は、なんとバラソルだ。

「もう大丈夫ですよ、行きましょう」

「二人とも、遅く帰らないよう気をつけて」

「うん」

突然、慣れた声が聞こえてくる。

「あらあら、行つてらっしゃい、マイサーーン」

運が悪かった。よつこひつて、お母さんと鉢合せしたとは思わなかつただろう。アーッ

「……」

「あら、十夜くんのお母さんにはれてしましました。うふふ」

「笑つてる場合じやないだろ、さつさと行こう」

僕たちはすたすたとあるじて、この場から離れる。

「さて、今日はどこに行こうかな？」

「おまかせしますか」

「うーん」

どこに行つたらいいのか僕が迷つている。

ハメを外して遊ぶところといえど、遊園地なら出来るのでよし、そこで決定。

「遊園地に行こうか？」

「……うん！」

夕奈は嬉しそうに頷いた。

お小遣いは大丈夫かな、かなり心配している。

お母さんのところに戻つて、お金をせがむわけにもいかないし、夕奈に払つても「うわけにもいかない板ばさみになる。

もう行つてしまつたから、挽回することもできないから、思い切つて行つちゃうしかない。

僕たちは遊園地についた。目の前に、大きな看板で「ようこそTDA」って書いてある。確かに、TDAは東京ダジャレアミユーズメントパークの略だけど、なぜかPが抜けているか、その理由は誰でもわからない。

「夕奈ちゃん」

「ん？ なんですか？ 十夜くん」

「先に何をやりたい？」

「う～ん あの大きな機械で、そしてスピード早くて、傾斜が強い斜面で勢いよく滑走して、グルグル回つて、みんなが楽しく叫んでいるアレを遊びた～いです」

大きな機械、傾斜が強い、グルグル回る、まさか……
ジエットコースター？

心臓に悪いので、やめた方がいい。ぶつちやけ自分が怖いだけだ。しかし、自分が怖いという言葉を口から出せないだろう。こういう場合は、遠回しにやめさせるしかない。

「あのう、夕奈ちゃん」

「はい？」

「それはジエットコースターというのだ。みんなが楽しく叫んでいるじゃなくて、怖くて叫んでるだけだ」

「怖くて、そして叫びますってこと？」

「うん、そうだ。夕奈ちゃんが泣くかもしれないから、やめた方がいいと思う」

「う～ん 別に泣いても大丈夫じゃないですか？ 十夜くんがずっとあたしの側にいるから」

「ジエットコースターを乗りたい～乗りたい～

「……」

「乗りたい、乗りたい、ジェットコースターを乗りたいです」

「……」

もはや反抗の余地はない、乗るしかない……

例え自分が怖くても、男らしさをアピールしないと……

僕はおずおずとジェットコースターのカウンターに行く、隣の夕奈が楽しそうに見えるのに……はあ

「何名さまですか？」

「2名です」

「好きな席にどうぞ」

よかつた、ちょうど人が多くないから、もうちょっと後ろに座る。ジェットコースターのかなり後ろの席に歩いて行く時、夕奈が思ひがけないことを言った。

「十夜くん、一番前に座りませんか？ あたし、前に座りたいです」

「……」

一番前に座ると、僕はマジで死ぬぞ……やめてくれ。

でも、後ろに座りたいとおいそれと言えない。

あげく、僕も夕奈と一緒に前の席に座ったハメになった。

「はいはい」

「それでは出発します」

十夜、逝つて来ます……

スタッフが機械を操作するとともに、ジェットコースターが動き始める。

そして、だんだんと昇つていいく。

「十夜くん、見て見て、周りの景色がきれいですね」

「……」

景色を眺める場合じゃない……

「ほら、十夜くんも見て」

「……」

僕は最初から田を閉じている……田を閉じたら、すこしでも怖く

なくなるだらうと思ひ。

ジョットコースターが一番高いところで止まり、そして……
急速で一気に落下してしまつ……

「うわわわあああ、たゞすへけて」

おそらくこのスピードじゃ80キロ以上もあるだらう。

一瞬だけ、ビルから飛び降りる感覚を理解した。

だが、スピードがなかなか減らず、かえつて加速していくような
気がする。ちょっとだけ目を開けてみると、360度回転のループ
が2回もその先にある。

神さま、僕はまだ若いから、そのまま僕の命を奪わないで……と
祈っている。

「あははは、楽しい~」

夕奈はそれをものともせずに、楽しく叫んでいる。
初めてジョットコースターを乗つて怖がらない女の子なんている
はずがない……ありえない。

後ろからの叫び声と夕奈の叫び声が飛び交つて、僕の意識がだん
だん弱くなつていぐ。

ならば、僕も叫ぼう

「うわあああああああ……」

僕はまだ目を開けてみる、目に映る景色がまったく違う。
今はループを回転している最中だと気づかなかつたのだ。

「お、おっ、落ちるううう……」

僕は絶叫する、しかし、聞いてくれる人はいない。

なぜなら、他の人も叫んでいるから。

怖くても、目を閉じて、叫ぶしかない。こんな絶体絶命の窮地に、
大事なことを思い出した。

夕奈がスカートを着ている……

ループを回転すると、スカートがそのまま遠心力を受けて、下を
向いている。

つまり、パンツが丸見えになつてしまつ。

「あははは、楽しい～」

本人はまったく気にせずに、無我夢中で楽しむ。

ジョットロースターのスピードがだんだん減つていぐ。

最初の位置に戻り、そして、止まつた。

たつた2分間に、何回も死んだよつな気がする。心臓が飛び出しそうだつた。戻つてきてよかつた……

「楽しかつたです」

「ああ……」

恐怖の余りに顔を青ざめた。

「どうしたんですか？ 顔が真つ青になつて」

「いや、なんでもないけど、ちょっとトイレ行つてくれる」

「とりあえず、そこのベンチに座つて待つてね」

「はい」

夕奈をベンチに座らせる。

そして、僕はトイレに向かつて、顔でも洗つ。

「ふはあああ、生き返つた」

リフレッシュした。

でも、夕奈の前にこんな姿になつて、無様だつた。

次はちゃんとアピールしないと……今回の遊び（ある意味デート）は台無しだ。このままくじるわけにはいかない。

まず、財布を確かめてみる。

まだ余裕かな、アイスクリームでも買つて来ようか。

……
アイスクリームを売つているおじさんがいた。

「チヨコとバーラーつづつください」

「400円です」

「はい」

「ありがとう」ゼこました

僕はアイスクリームを持って、夕奈のところに戻る。

やがて

「遅いですよ、十夜くんつてば」

「ごめん、変わりにアイスクリーム買つてきたから、さあ、溶けな

いうちに食べて」

「うん、ありがとうね、十夜くん、大好き～」

夕奈は下をぺろりと出して、アイスクリームを食べ始める。

「美味しいです」

「早く食べ終わって、次のゲームに行こひ」

「うん」

僕たちはすばやくアイスクリームを食べ終わった。

「じゃ、次はどこ行こうかな?」

「テレビで見たの、たくさんの人気が変な服装を着てオシャレをして、あるハウスの中にお客様を待つて、お客様に出来たら挨拶をするところへ行きたいです」

オシャレ？ お客様？ 挨拶？ まさか……

「夕奈ちゃん」

「ん？」

「変な服装つて、どんな服装つて分かる？」

「わかりません、えへへ」

「……」

「そこはとても暗い？」

「とても暗いとは言えないんですけど、一応暗いですね」

間違いない、お化け屋敷だ。

「夕奈ちゃん」

「はい？」

「あれはジエットコースターよりも怖いけど、大丈夫？」

「うん、十夜くんが側にいるから、なんでも怖くなくなりますう～

「……」

僕はそりゃないけど。

夕奈がそんなことが言つなら、つまり、僕は夕奈に安全感を与えられる？

それぐらいは分かつていい。

ありがとう、浩平。おまえのムダ知識はたまには役に立てるよな。
僕たちはさつそくお化け屋敷に向かつ。

「いらっしゃい、ようこそ！」

「二人です」

「はい、どうぞ」

僕たちはお化け屋敷の入り口に向かつ。

入つたとたん、周りが暗くなってきた。時折聞こえてくる誰かの喘ぎ声、そして、館内に流れる怪しい雰囲気の音楽、さらに唯一の明かりとした照明器具のキャンドルは青色で人だまに見えるしかない。

「十夜くん、どこにいます？」

「心配しないで、ずっと夕奈ちゃんの側にいるから」

「ほら、手を出して」

夕奈は手を出して、私の手と繋いだ。そのやわらかい感触は再び感じられる。やっぱり男の手とは大違ひだった。

僕たちはゆっくりと歩き続ける。

さらに、違うエリアに着いた。

しかし、ここはさつきのところとかなり違つていて

キヤンドルがちらちらとする。動いていいけど、それだけでも十分怖い。明滅の時間をしつかり掴まないと前に進みづらくなる。

「ねえ、どうしよう？ あたし、こわいです」

「僕が先に歩く、夕奈ちゃんを守るから、大丈夫」

「う～ん」

夕奈は消え入りそうな声で答える。

突然、変な声があつた。

「アタシヲオイテカナイデ」

どこかの罠に陥るらしく、右側から血まみれのからくり人形が出た。

「うわあああああ……助けて、十夜くん」

からくり人形に驚かせるより、夕奈の叫び声にぎょぎょっとした。

「目、目を閉じて」

怖いから、目を閉じるのは常識だと思いつつ、そつ夕奈にアドバイスする。

しばらくすると、からくり人形が消えた。

僕たちはさらに歩く。ようやく出口が見える。

しかし、突然、キャンドルの明かりがすっかり消えてしまつ。そして、両側から変な声が聞こえる。

その時、あるお化けの少女が懐中電灯を持って、ひつひつと歩いてくる。

「オカエリナサイ、アイジン！」

「うえええええ」

僕はぞっとした。

この仕掛けはわざとだろ？

もともとカツプルがお化け屋敷に入るのは一番多いからといって、こんな仕掛けを装置とはさすがに喧嘩を売つてゐるよつて見える。

「十夜くんはあたしのものですから、誰にも譲れません」

夕奈がめげずに少女に言つ。

しかし、あたしのものって、いくらでもそれは言い過ぎる。だが、少しでも心の中に喜ぶ。

「……」

そこまで言わなくても……

僕たちは懐中電灯の明かりを利用して、出口に向かう。突然、視界が遮られて何も見えなくなる。

「んんん……」

「うわあああ、十夜くん、て、手が

「繋いでるけど？」

僕は意識した、上から仕掛けがあつて、突然落とした誰かの手（偽もの？）が僕の顔に当てる。

僕は慌てふためいて手をかき分けて、やつと視界が見える。

「走るぞ」

「うん」

僕たちはひたすら走って、出口に向かひ。

「ふはあ、怖かった」

「しくしく」

夕奈が泣きそうな顔で僕を見ている。

「うええええん」

「泣かないで、僕がいるから」

「うぐつ」

「テレビとは全然違いますう、えぐつ……」

僕は子供をあやすように、夕奈を撫でる。
「もう大丈夫だから、泣かなくていいから」

「んぐつ」

しばらくして、夕奈が泣き止んだ。

それが、5分後のことだ。

「ほり、笑つて」

「えへへ」

泣き顔から笑顔に変わつてしまつ。

「では、次は僕が提案する」

「ぐーぐー……」

まだ次はどこに行くか行つていないので、お腹が抜け駆けして、自分

の意見を出してしまつた。

「くすくす」

「それより、飯にしよう」

「うん、好きにしていいですよ」

「……」

僕は先に財布の中身を確認してみる。

樋口一葉1枚、これじゃ足りるだらう。

「じゃ、あっちのフアミレスにしようか?」

「……うん」

……

「いらっしゃいませ、何召もまだですか？」

「すぐです」

「席を『』案内いたしますので、少々お待ちください」

「お願ひします」

しばりべすると、席についた。夕奈は、もつ先にメニューを見て
いる。

「どれがいい？」

「えつと」

突然、夕奈の目がきらめくように見える。

「このステーキがおいしそう……あつ、サラダもおいしいなあ、パ
ンもいいね、迷っていますね」

「ふわ～あ」

きつと夕奈の頭の中に、いろんな食べ物の形をイメージしている
だろ？。

「夕奈ちゃん、夕奈ちゃん」

「ふわ～あ」

返事が来ない、完全に無我夢中になっている。

僕は夕奈の耳に息を吹きつける。

「きやはは、くすぐつたい……」

夕奈の大聲で、みんなの視線が注がれる。

「びつくつしないでよ」

「おい、声がデカイって」

店員さんが突然寄つてくる。

「すみません、お客様、店内でなるべく大声で話さないでください

い

「すみません」

「す、すみません」

ぐーぐー

まざい、僕のお腹がまた鳴っている。早く注文しないと。

「とりあえず、何か注文しよう」

「じゃ、これとこれで」

…

…

「お腹がパンパンになつた」

「あ、あのう、デザートを食べたいんですけど……いいですか？」

「いいよ、どれどれ？」

夕奈はメニューを見て、目標を探している。

「これでいい？」

夕奈がさしているのは、かなり高いチョコパフェ、しかも、カロリーは値段より高い。これを食べたら太つても知らないよ……

「おいしそうけど、太るよ」

「大丈夫、一緒に食べましょ」

「そうしよう」

「いきなり禁句を口に出してしまった。だが、夕奈は全然怒っていない

い。

…

「お待たせしました。ご注文のチョコパフェです」

僕たちは見つめながら、チョコパフェを食べる。もともと甘いチ

ヨ「は、せりに甘味を加える。まるで砂糖を食べていのよつた甘さだ。

「少し」「」で休憩しようつか

「うん」

他愛のない話をしながら、時間がどんどん過ぎていく。
あつという間に、6時半時だ。

「もう6時半だ」

「そうですね」

「つれて行きたい場所がまだ一つ残つてゐる、時間は大丈夫?」

「大丈夫です」

僕が最後に夕奈をつれて行きたい場所は……

「手を貸して」

「うん」

僕は夕奈と手と手を繋ぎながら、大観覧車の方へ行く。

「いらっしゃいませ」

「二人です」

「かしこまりました」

チケットをもらつた後、僕は夕奈に手を伸ばす。

「さあ、どうぞ、マイプリンセス」

「プリンセスって恥ずかしいです、普通に呼んでもらえます?」

「あ、ごめん」

「あらためて、どうぞ、夕奈ちゃん」

「うん」

夕奈がワンピースの裾を掴んで、ゆっくりと観覧車を乗つた。

観覧車が徐々に動き始め、空へと上がつていく。

周りがだんだん暗くなつてゐるけど、夕奈の身体がだんだん光つて
いるように見える。

「夕奈ちゃん」

「な、に? 十夜くん」

「どうして光つてるんだ?」

「光ってる？ これですか？」

夕奈はつけているペンダントを取り出して見せる。
上弦月のペンダントだ。僕がつけているペンダントと似ている
特性を持っている。

「これが光ってる？」

「うん、周りが暗くなると、これが光りますよ、蛍光ペンダントで
すから」

蛍光ペンダント、聞いたことない。停電になつても、これを取り
出したらイケるじゃない？

「ちなみに、これは、お母さんがくれた大切なものです」

やつぱり夕奈も大切なものを持つていて。でも、人間がその大切
なものが失つたら、一体どうなるのか知りたい。

大切なものなら、どうやって大切にする？

「もし私はこれが欲しいと言つたら？」

「十夜くんが欲しいと言つたら上げますよ」

「じゃ、やつぱり要らない」

予想外の結果、夕奈はあっさりと答えた。大切なものだと言つた
のに、そう簡単に他人に譲るわけがない。

「どうして？」

「夕奈ちゃんの大切なものだから、勝手に奪つちゃいけないから」「このペンダントより、今のあたしは大切にしているのは、十夜く
んです」

いきなり夕奈の爆弾発言を受けて、僕は何を言えるか分からなく
なつた。とりあえず、女の子がそこまで言つたら……

つまり、チャンスが来た……今のうちに言わないと後悔するかも
しない。

「ボク、僕は」

「なに？」

「僕は、夕奈ちゃんのことが好きだ」

「世界中の誰よりも夕奈ちゃんのことが好きだ」

「こんな僕だけど、いい彼氏になれるかどうか分からぬいけど……」

「でも、僕はがんばる、頑張るから」「

「僕と付き合つてくれない?」

「……」

夕奈は何も答えなかつた。

ただ、目から涙がぽとりと落ちる。それが、うれしさのあまりに泣くに違ひない。

本人は答えなかつたけど、それだけで分かると思う。

夕奈の涙は、まさにその答えだ。

僕の質問に「はい」と答える気持ちが、ちゃんと伝わってきた。

「うれしいです、あたしうれしいです」

「田舎に生まれて育つたあたしに愛想をつかさず受け入れて、あ

りがとう」

「ありがとう」

夕奈が自ら田を開じて、頬をこすりながら寄つている。

まるでキスを求めるかのように……

僕はその行動に応じて、田を開じる。

そして、唇が重なり合つ。

「ちゅっ」

夕奈からチヨンの香りがする。そして、僕からのバニアの香りが混じつて、別格の味になる。

あつという間に、夕奈の唇だけでなく、身体も求めたくなる。

このままじゃまずいと意識している。

でも、理性が勝てなくて、手が無意識に変なところに移っている。

「あつ」

夕奈が変な声を出す。

「そ、そこ、ダメです」

「あ、あつ……」

夕奈が力ずくで抵抗する。

ダメだ、僕の理性が遠くなつていいく。

それをやつちゃいけないと分かっているのに。
僕の手がゆっくりスカートの方に移動する。
もうダメだ。誰か止めてくれ……

突然、一枚の黒い紙のような空が、さまざまな色に彩られ。鮮やかになつた。

花火だ。

花火が打ち上げるとともに、僕の意識が戻つた。

地面から一気に空に打ち上げた花火が、一輪の花となり、咲き誇れる。やがて、その花が次第に散つていき、暗い空に飲み込まれた。たつたの十秒だけで、花火が自分の役目を果たして、消えていく。まるで螢が発光した後、自分の役目を果たしたら、さらに死んで、この世から消えるに等しいとも言えるだろう。

寿命はかなり短いけど、自分の役目を果たせるなら、それでいいじゃない？

「きれい！」

「うん」

僕は思わず手を夕奈から離した。自分がさつき夕奈を犯そうとする行為にすこく後悔する。

お互に好きっていうならば、決して相手はダメとか言わない。

「さつきは」めんなさい、いつの間にか変な行為はやっちゃって「……」

夕奈は何も言わずに、ただ頬を染めて、顔を紅潮した。さぞ恥ずかしそうだらう。

「それより、花火を見ませんか？ セっかくのチャンスなのに」

観覧車がかなり高いところに回つている。

この角度から見ると、全般的に眺められる。花火と一番近い距離で、そして……

好きな人と一緒に……

結局、夕奈はさつき僕がしでかしたことに対する何も言わなかつ

た。

何も言わなかつたからこそ、逆に怖く感じる。
乙女心つて理解しにくいもんな。

「帰るうか？」

「うん」

観覧車を限りとして、僕たちは遊園地から家へ戻ることにした。
おそらく僕がやつしたことのせいで、あんまり夕奈と話さずにはゆつ
くり歩いていくだけになる。

「あのう」

「あのう」

僕たちは同時に話し出した。

僕は夕奈のことを気にせず、先に話す。

「さつきからずっとと言いたかつたけど、なかなか言えなくて
「本当にいいみんなさー」

「……」

相変わらず、夕奈はひとことも言わなかつた。

ただ、僕の頭を軽く撫でる。

「あたしが好きなら、こんなことをされても許します
「もちろんだ、こんなことは好きな人だけとしないと……」

夕奈は開き直つた。

「はいはい、この恥ずかしい話はここでおしまいー」

「早く帰らないと、お母さんにしかられますよ」

僕は腕時計を見る。

もう9時過ぎだ。

「ええ、もうこんな時間だ、夕奈ちゃん、急いで、おばさんは心配
するだろ」

「うん」

「今日はいろいろ、ありがとうございました、アイスクリームと、
十夜くんがあたしに使う大切な時間と、そして、キ、キス……
夕奈が消え入りそうな声で言つ。

「…ちりんか、女の子と遊んだ」とない僕と付き合ってくれて、ありがとう」

「うん、それでは、おやすみなさい」

「その前に

「ん?」

僕はすばやく夕奈の頬にキスした。

夕奈の顔がバラより赤くなつて、もじもじしている。

「あ、ありがとう」

「じゃ、おやすみ」

「うん! おやすみなさい」

「ただいま

「あら、遅いね、もしかして……」

「夕奈と何かイケナイことをしちゃつた?」

イケナイつて。

「何もしなかつた、しなかつた」

僕は頭を左右に振る。

危うくイケナイことをしたといひだつたのに。自分の良心を呵責かしゃくする。

「晩ご飯もう食べた?」

「うん、食べたよ、夕奈ちゃんと一緒に」

「あら、よかつたね、摃つてるわ

「頑張つてね、十夜ちゃん」

またからかつてくる。

「何を頑張る?」

「なんでもない、なんでもない、えへへ」

お母さんは笑い声でお茶を濁した。

「……」

「明日また学校があるから、僕はもう寝る」

「はー、おやすみなさい、十夜ちゃん」

「おやすみ、お母さん」

僕はベッドに寝転がっている。

たぶん、夕奈も寝たかな。携帯があればいいのに、もつと夕奈と話したい、それが、恋する男女の気持ちっていうもの？

しかし、僕の知らないうちに、隣に何か変なことが起こっている

僕は変な夢を見た。誰が誰か全然わからない。

「あ、あなたは誰？」

「私？ 私はあなたですよ。」

「あなたは私？ 何を言っている？ 分からない、あたし分からないよ？」

「人を好きになることができないと分かっているくせに……」

「人を好きになれない？ 何だよそれ？ 冗談じゃない？」

夕奈は腑に落ちない。

「どうして、あたしは分からない、どうしてあたしは他の普通の人のように他人を好きになれないの？ 答えて」

「その理由はない、なぜなら」

「あなたは私だから」

「あなたがもし誰かを好きになつたら、その人の回りの人人が不幸になる、それは、取り返しがつかない事実だと分かつてく」

「……」

「そろそろ時間だ、さあ、お眠りなさい」

どこからの一道の光が射て、夕奈の身体を射抜かれた。

「あああああ」

痛みを感じてないけど、身体の力がだんだん抜けていく。
むしろ吸われていく。

助けて、十夜ちゃん……

翌日、僕はいつもの通り起きる。

なんで昨日はそんな夢を見たのか理解できない、もう一人の夕奈?
好きになれない? さまざまな言葉は頭の中に入つて、夕奈への不安を苛立たせる。

「おはよう、十夜ちゃん」

「କାନ୍ତିକାଳୀ」 ଶବ୍ଦରେ କାନ୍ତିକାଳୀ

なしでいい

「あら、めずらしいね、何があつたの？」

「何もないから、心配しないでね」

お母さん心配をかけたくないから、あえて嘘をついてしまった。

何か悪い予感がする。

「頼む、何せ超ひないよ」「え？」

「行ってくる」

「トトロ」

行
一
九

「僕は思わず外窓のところに行ってしまった」

夕奈が、人してゐるが、

返事かない

卷之三

卷之三

外祭ナニヤト おはなし

何度も呼んだけど、返事がない。

ずつここにいて先仕方ないから、僕はさきに学校に行くことに

した。

途中、夕奈の姿が見える。

「タマサヒコト」

卷之三

夕奈は脇目も振らずに、そのまま行ってしまった。だが、僕の目

に与る夕奈の目は、血の「」とく赤い、それに、なんとなく殺氣も感じられる。とんでもないことも起こったらしい。

僕は黙つてその場で立ち尽くした。

何があつたのか？ やっぱり昨日の「」を怒つたのか？

引き続き、僕は夕奈を追跡する。

だが、夕奈はいつもと違つて、異常なスピードで歩いている、僕は走つても追いつかないスピード……やつぱりおかしい。

もしかして、昨日の夢を何の関連があるのか？

腕時計を見て、もう8時20分だ。一時限目まであと10分だ。

急がないと間に合わない。

とにかく、学校に戻るしかない。夜になつたら、夕奈が家に戻るだろ。

僕は急いで学校の方向へ向かつ。

途中で、浩平と出会つた。

「よつす」

「おはよつ」

軽く挨拶をした。

僕は浩平のところに行こうとした時……

「くつ、ぐはあ……」

突然、浩平の口から、血反吐を吐き出した、さりとて、赤い液体がドロドロと流れ出す。

間違ひなく、浩平の血だ。

「うわああああ」

痛みを耐え切れずに、浩平はのた打ち回る。

その理由は、謎の少女が鎌を持って、浩平の背中を薙いだということは明白だ。

そして、浩平が瞬間力を失つて、パタンと倒れた。

僕は少女に怒鳴る。

その少女はマントを身にまとつて、顔まで遮られたせいで、一体誰かわからない。

「そこのおまえ、何者だ？」

「……」

「それはあなたには関係ない」

「私はただ、私の役目を果たすだけだから」

「それじゃ」

「そのあと、少女は背を向けて、行ってしまった。

「待って……」

「……」

結局、謎の少女は誰か分からずじまいだ。

何も出来ない僕は、力をなくして、跪いて、浩平を抱いて悲鳴を上げた。

「そんなのいやああああああああああああああああああああああ

僕は立ち尽くした。

浩平に向もしてあげられない自分を嫌う。

ビー・ボービー・ポー……

救急車の音が聞こえる。誰かが呼んでくれるのだろう?

しかし、浩平はとっくに気絶した。

どうか、間に合いますよ!」

僕は学校に戻って、先生に報告しないといけないから、浩平の側にいられなかつた。

「すまんな、浩平、許してくれ……

自分を痛恨する。

僕は走つて学校に行く。

「ぜえ……ぜえ……」

ようやく校門についた。

誰もいない。今日は休みじゃないのに、何故誰もいないのか?

その時、ある知らない女の子がこっちに寄つてくる。

同じ制服を着ている女の子が目の前に立つてゐる。顔から見ると、僕より年下の女の子に見える。制服は僕が着てゐるのと同じで、学

校の後輩に違いない。顔は、氣の強そうな女の子に見える。

「誰だ？」

「はわつ、びつくりした」

「それはこっちの台詞だ、それより、名前は？」

「わたし？」この学校の1年生の結末といつの、よろしく「弓」？』

「ち～が～う、結いの『ゆ』、未来の『み』、結末」

「あ、ごめん」めん、僕は十夜、よろしく「わざと間違ってるじゃないですか？」

「いや、それより……」

謎がだんだん大きくなるから、もう自己紹介している場合じゃない。

「今日は休みじゃないのに、誰もいなって、何かあつたって知ってる？」

「はああ……」

結末はため息をついた。

「さつきのこと、全部見たから

「！？」

僕はあつと魂消る。

「ちなみに、救急車を呼んだ人も私……」

「学校の人を非難させる人も私……」

「へえ！？」

すごいな、結末。

「とにかく、町中に暴れている少女を見つからないように、早く家に戻つて」

「分かった、結末ちゃんも気をつけて

「うん」

僕は脱兎の如く、走つて家に戻る。

ますます不安が募る。

『あなたがもし誰かを好きになつたら、その人の回りの人人が不幸に

なる、それは、取り返しがつかない事実だと分かつてくれた夢の話を思い出した。

『あなた』って一体誰のことを指しているのか？ 僕？ 夕奈？ それは分からぬ。

願わくば、これ以上他の犠牲者が出来ませんよつとやつと家についた。

僕はドアをアンロックして、入るひつとする。

「お母さん、いる？」

僕は叫ぶ。

だが、家の中に誰もいない。

僕は慌てふためいてあちこちを探す。

まずは部屋、いない。

ただ部屋のドアを開けるだけでなく、たんすのドアも開けたけど、いなかつた。次はトイレ、だが、そこにもいない。最後はバス、あいかわらずいない。

一体お母さんはどこにいるのか？

心の中の不安が拭えない。かえつて募つていぐ。

ここで待つても仕方ないから、僕は街に行つてお母さんを探そうとした。

「お母さん、どこにいる？」

静まり返った街中に叫ぶ。

それにしても、答えてくるのは、いつに吹いてくる風だけだった。

商店街に行こうとする、お母さんはそこにはいるかもしねない。

「お母さん……どこにいる？」

商店街の中で叫ぶ。

「はい、ここにいるよ～

それは、間違いなく、お母さんの声だ。

「やつと見つけた、お母さん、よかつた」

消え入りそうな声でお母さんと言づ。

「あら、何があったか？十夜ちゃん、学校は行かないの？」

「ううん、いろいろ事情があつて、今日は休みになつた」

「とにかく、お母さんはここにいてよかつた、うぐう」

「あれ？泣きたいけど、だが、なんだか涙が出てこない……なぜだろう？」

お母さんを見つけた気持ちを表したい……泣きたい……だか、涙腺から何も出られない

そんなこと、ありえない。

もしかして、何年間も泣いたことないから、もう泣くという事が完全に忘れてしまつて、泣けなくなつた？

『笑いたい時に笑う、泣きたい時に泣く、それは、私たち生まれてから分かる常識……』

『ただ、さまざまの感情の中に、もし、一つの感情が奪われて、これからも表せなくなつたとすれば、あなたはどうします？』

ふと夢のことを思い出した。

なぜ僕は泣けなくなつた？なぜ僕は狙われている？なぜ僕だけ？

「 」

頭がズキズキと痛む。

ここに悩んでも無駄だ、早く家に戻らないと……

「お母さん」

「はい？」

「ここは危ないから、早く戻って、僕と一緒に」

「あぶない？それより……」

「さつき買い物に行こうとしてここに来たけど、どの店も閉まつているつて

「十夜ちゃん、やつぱり何があったか？」

「後で話すから、とにかく、早く一緒に戻ろう」

その時、ある人影が僕たちの前に現れた。

「お母さん、下がつて」

僕は警戒する、もしそれが夕奈だったら、すぐ逃げる。

そうするしかない。

「ん? どうしたの?」

「とにかく、下がつて」

「あつ、うそ」

人影の方から声が聞こえる。

「ちわっす

「結末の声だ。ほつとした。

「もういいよ、お母さん」

「お母さん、その人は僕が通ってる学校の後輩、結末だ」「結末と申します、よろしくお願ひします」

結末は礼儀正しくお母さんにお辞儀をする。

「十夜のお母さんです、息子はお世話になりました。」
ひかりひやよ
ろしくお願いします」

「いえいえ、今日出会つたばかりですから、あはは」

「あらあら、そうなのですか?」

「くすくす

お母さんはこっちを見て、笑っている。

僕は一股なんかかけてないよ。ああもう、変な誤解をしないでください、お母さんってば。ちょっと口を挟んでみないと……話をそらしたい。

「結末ちゃん」

「どうした?」

「どうしてこりこりする?」

「さつやけにこの人を避難させたから、これから病院に行こうと思つて……」

「病院? 浩平の調子でも見に行くのか?」

「そうそつ、わたしのせいだ、夕奈を止められないから、浩平がこんな酷い目に……つぐ、……ぐすつ」

結末が地面にしゃがんで泣いている。

「泣かないで……結末のせいじゃないから」「そうだ、あの少女のせいだ。

「ところで、浩平って、十夜ちゃんの友達?」

「うん、学校で唯一の仲良しだけど」

「では、浩平くんは病院にいる?」

「うん、これから行こうとする、お母さんも一緒に行く?」

「別にかまわないけど」

「行きたくなくても行かせてやる。

どうしてもお母さんを一人にさせないから。

もし、このままお母さんを家に帰らせら、何があつたら、僕は一生も自分を責めるまま生きていることになる……

僕たちは3人で病院に行く……

カウンターに行つて、ちょっと情報聞いてみる。

「すみません」

「はい、なんでしょうか?」

「さつき怪我して運ばれたけが人がいます?」

「少々お待ちください、今チェックしますから」

「お待たせしました。えっと、一人しかいませんけど
一人? 他人はいないのか?」

やつぱり、浩平のような犠牲者が一人しかいなかつた。

『あなたがもし誰かを好きになつたら、その人の回りの人気が不幸になる、それは、取り返しがつかない事実だ』

誰かを好きになつたら、その人の回りの人気が不幸になる? ふざけんな、どういう理だ?

まさか、その『誰か』のことは、僕のこと?

とりあえず、浩平の様子を見る。

「その人は今どこにいるか教えてくれませんか?」

「あなたたちはけが人の身内ですか?」

「いいえ、友達です」

「けが人は集中治療室にいます」

「ありがとうございます」

集中治療室の中に、浩平が伏せている。隣に一人の医者がいる。浩平を看護しているようだ。

「ひどい、誰か浩平くんにこんなことを」

お母さんはすすり泣く。

これだけを見て、結末がまたしゃがんで、泣き始める。

集中治療室に入られたら、死に直面しているということになると、いつ可能性が高いって先生から聞いた覚えがあるって思い出した。浩平、おまえが先に行つたら、僕の最後の友達も失くした……早く元気になってくれ。

恋人なんかどうでもいいから、元気になつたら、また一緒に遊ぼう……

二人だけを見て、僕も泣きたくなつた。

だが、同じく涙が出なかつた。声しか出られない。一体、僕の身体に何の変化があつたのか？ そんな滑稽なことは人間の体にはないはずだ。

僕は無言のまま、病床に伏せている浩平を見て黙つていて。時間がだんだん過ぎていく。

「そろそろ行こうか、ここで泣いてもなにもならないから」

「謎の少女を探して、直接に聞かないと、なにも解決できない」

「うん」

泣きやんだ二人を宥めて、僕たちは病院を後にした。

今の時間は午後4時、街中に誰もいない……皆は生きられるために、既に家に戻つて、避難してしまつた。

風の音もはつきり聞こえるような静けさの中に、僕たちは歩いている。目的は一つしかない。謎の少女を見つけ出して、そして、問い合わせすこと。

身の安全を前提として、僕たちは3人で探ししている。いざという時でも、男の子がいるから。だが、お母さんと結末を守りきれる自

信がない……

探しに探しても、なかなか見つからない。

「うふふ、見つかった」

その声が、謎の少女ではなく、夕奈の声だ。

「あっちだ、早く!」

「はい」

「うん」

急いで声の行方を捜す。けど、心当たりはない。

上なのか、下なのか、左なのか、右なのか、全然分からぬ。

「うふふ、こっちだよ」

夕奈は再び話す。

今回はちゃんと声の行方を掴めている。学校の屋上だ。

「夕奈ちゃん　ん

僕は叫ぶ。

「……」

夕奈はいかわらず声を出さなかつた。

「今すぐそっちに行くから、待つて」

僕たちは急いで屋上へ向かう。

「！？」

夕奈が端っこに座つてゐる。

夕奈は何も知らぬいぶつこ、話としている。

「あら、夕奈、危なによ、早くこひつちに来て

「……」

「ど、どひつよう、こままじやまづい」

「とりあえず、結末ちゃん、お母さん、僕一人で夕奈のところに行くから、ここにじつとして

「うん」

僕たちは一緒に屋上に上る。そして、僕一人で夕奈に上る。

一人は頷いて、僕はゆっくりと屋上の端っこ、夕奈が座つてゐるところに近づく。

一人は夕奈に見られない場所に隠れて、状況を見ている。

「来るな！」

「！？」

夕奈は突然大きな声を出して、僕は驚愕した。

お母さんと結末は固唾を呑んで、状況を見る」としか出来ない。

「なぜだ？ 代わりに、一緒に帰ろう？」

「いやだ！」

「……」

「ねえ、夕奈ちゃん……」

「ワタシは、夕奈じゃない……」

第5話

夕奈の返事に何も言えなかつた……顔は夕奈とそつくりの女の子の口から、自分は夕奈じやないって。

「夕奈ちゃんは夕奈ちゃんだ、他の誰にもない…………」

「黙つて！」

「……」

僕はその場で立ちつくした。何度も自分が夕奈じやないことを言うに無力感を感じる。

「ワタシは夕奈じやない」

「ワタシは、夕音」

夕音？ ひょつとして、夕奈とそつくり顔の双子？

僕は夕音の答えに窮する。夕奈、夕音？ 一体誰が誰だろう？

「もう話が済んだから、帰つてくれださい」

「えつ？」

後ろにずっと見ているお母さんはいきなり声を出した

「誰だ？」

一道の光が夕音のところから放つて、結末とお母さんが隠れる場所に一直線と向かっていく。間違いなく、浩平が当たつた光と同じだ。

「危ないっ

突然結末がお母さんの前に立つて、バリア防壁を張つて、お母さんを守つた。

「ちつ、防いだか……」

僕はその二人を見て、目を丸くした。

ここは現実？ 夢？ それとも、現実でも夢でもない世界？

僕は思わず頬をつねつてみる。

「いてっ」

痛みを感じられる。ここは現実の世界だな。だが、現実の世界で

こんな攻撃を使える人がいるなんて不条理だ。

「やめて」

またどこからの声が聞こえる。

「あっ、ぐはっ」

わけの分からぬ痛みが出て、夕音はのたうち回る。

「夕音、やめて」

夕奈の声、だがどこからか分からぬ。

「だつ、黙つて、静かに、眠つてしまえ……」

今度は夕音の声だ。

「黙らない……助けて、十夜くん」

今度は夕奈の声だ。

夕奈と夕音の声が順番で次から次へと出でいて、夕奈がどこにいるか確認できなくなつた。

結末もお母さんもずっと何も出来ないまま、僕と夕音を見ている。

「ああああああああああああ」

夕音がもがく」とさえできなくなつて、地面に倒れた。

「夕音」

「行かないで」

結末がしゃべりだして、僕を止めた。

「夕音はまだ氣絶しない」

「アリーズドミール、アーメン」

「と、十夜くん、た、す、け、て……」

これが、僕が最後に聞こえた夕奈の言葉だった。

「はああ、はああ」

夕音は息を切らしている。

「ようやく収まった」

「あなたのせいでの、ワタシはどれほど苦しむのか、ゆっくり寝るがよい……」

結局、夕奈はどこにいるか分からずじまいだった。ただ、夕奈の

声だけを聞いて、心の中の不安が収まらない。

そのとき、思いがけなく、結末が僕の前に出た。

「おねがい、やめて」

「……」

「役目を果たす前に、ワタシは止めない……」

「おねがい、これ以上おねえちゃんを苦しめないで」

夕奈のことをおねえちゃんって？ 待て、夕奈から妹がいるって聞いたおぼえがない。もしかしたら、夕奈がずっと探ししている人は結末のこと？

夕奈がわざわざ上京して、自分の妹を探すのか？ なるほど…

…それより、結末は夕奈がいる場所を分かつてているのか？

「お姉さん？ 冗談じゃない？ 顔さえ似てないのに……」

夕音に言われてみると、確かに、夕奈と結末の顔はぜんぜん似てない。

どつちかにせよ、結末が夕奈とは姉妹であることを口にして、その驚愕の言葉を聞いて、僕はその場で立ちすくむ。今すぐ聞きたいが、なかなか口を挟めなかつた。

「信じないでしょ？ これを見て」

結末は首につけているペンドントを取り出して、夕音に見せる。「普通の下弦用のペンドントじゃない？ これだけで何も示せないじゃない？ ワタシをバカにする気？」

「本当にそう思う？ 自分の首を確認してみて」

夕音は自分の首を触つて、確認する。

もともとそれは夕奈の身体だから、上弦用のペンドントがつけているということを分かつてている僕は、その場に立つて見ていいだけしかできなかつた。

突然、思いがけないことが起こつた。

二つのペンドントもキラキラと輝いている。どこからの引力を受けて、二つのペンドントが近づいている。

「なんだこれ？ 目が見えなくなる

夕音がそういうながら、手をかざした。

「お母さん、目を閉じて」

落ち着いて状況を見ているお母さんと結末は、思わず目を閉じた。
「まぶしすぎる、いつたい何が起こっているだらう」「僕も手をかざして、何も見えなくなる状態になつた。
しばらくすると、一つのペンダントが合体して、一つになつた。
真ん中にぽつかりと大きな穴が開いているのはっきり見える。

「……」

あまりにも突然のことにつ、僕たちは何も言えなかつた。ただ、そのペンダントを見ている。ただ、一つになつたペンダントを持つている結末は、何の表情も示さなかつた。

「あはは」

夕音は軽蔑するよつに結末に向かつて笑つてゐる。

「冗談にもほどがあるわ……」

「おかしい、おかしい、このペンダントは、どう見ても普通の指輪に過ぎない」

「それで何が証明できる?」

結末はゆつくりと僕の方に向かつてくる。

「ゴメン……」

「いきなり謝つてきて、何があつた?」

結末が僕にすがるような視線を見て、僕の肩にもたれかかつてくる。

「ゴメンなさい」

「ぼたぼた……」

あついものが感じる、それは結末の涙だ。

どうして結末が泣いているか、おそらく結末自身以外に分かる人はいない。

「今のうちに言つておかない、たぶんまた言えるチャンスがない」
ますます状況が分からなくなってきた。

「一人とも、そこで何ぼそぼそ言つてる?」

「なんでもない、なんでもない、すぐ終わるか」「僕は適当にこまかした。

「十夜ちゃん」

「今度はお母さんの番だ。」

「何？　お母さん」

「女の子を泣かしてはいけません！」

がくり。

大事は話だと思ったのに。

そっちが勝手にもたれかかって泣いているのに。僕は無実だ。

今さら何を言つても信じてくれないから、せめて結末になんとかしないと。

「これで拭いて」

僕はティッシュを取り出して、結末が一枚を取つて、涙を拭き拭い始める。

「もう待てない、恋愛ドラマをやるなら家でやりなさい」と夕音が鎌を持ち出して、お母さんに向かっている。

「ダメえ

また夕奈の声だ。

「やめて、おねがい」

ますます声が大きくなる。

「もう誰にも止められない、はああっ」

夕音は痛みを耐えながら、お母さんの方に向かっていく。

「いやあああ

「来ないで、わたしを殺さないで」

お母さんも夕音も悲鳴を上げる。

その悲鳴は学校中に響き渡った。まるで森の中で親が死んで、叫んでいる獣たちのよづ。

「あぶない、ぐつ

これは一瞬のことだ。

結末が全身の力を使って、お母さんのところに飛び掛つて、抱き

ついた。そして……

血の匂いがする。赤くて、生々しい血が、結末の身体からじゅぶん噴出した。

「どう、どうして？」

「どうしてその女に飛びかかった？」

夕音がいきなり結末に質問を立てる。

「せ……せめて、とお、十夜の、お……おかあさんを！」、「う……さないで」

「なんでその女を守らなければならぬの？　自分の命はどうでもいいのか？」

「わ……わたしは……どう、どうでもいい……かり」

「ど、十夜の……や、さこ！」、「あわせを……が、まもる」

結末は手のひらにペンダントを握ったまま、お母さんの上に倒れた。

「バカ……あんたは」

ひどい、ひどすぎる。どうして僕の幸せを奪わないといけない？　僕は何が間違ったことをした？　殺したいなら僕を殺せばいいのに。

「ああ、次はあんたのお母さんだ」

「もう守れる人はいない、あんたが守るなら、あんたまで殺す」「殺されてもいい、お母さんが死んだら、僕も生き続けていく勇気はない。

「ダメ、そんなことはさせない」

「ま、またあんたか？　あっ、ああああ」

何回も聞こえる夕奈の声だ。依然として居場所は分からぬ。かえつて、夕音が悲鳴を上げて、頭を抑えて、痛みを止めようとする。

だが、その努力はむなしく、痛みが続いている。

「ああああああああ……」

「あたしが知っている十夜くんは、そう簡単に諦めると言つ人では

ない

「夕奈ちゃん……」

「本当に死にたいと思つてこらのなら、殺される前に、別れよつ」

「夕奈ちゃん……僕、僕……」

「十夜ちゃん」

力が失われて、僕は立てる気力もなく、地面にしゃがん。お母さんは静かにこんな情けない僕を見ていて、何も言わなかつた。

一方、夕音は痛みを耐えられなさうに、地面に転がつている。

「さあ、十夜君」

「あたしの妹、ゆみが握つているペンダントを取つて」とにかく、しゃがんでないで、立つて

「十夜ちゃん、これ

「ああああああああああ

夕音の叫び声はまだ止まらない。僕はそれを無視して、お母さんからペンダントをもらつた。

「そして、十夜君、あなた自分のペンダントを取り出せして

「あら、これは5年前、十夜ちゃんの誕生日プレゼントのために買つたペンダントじゃない?」

「そうか? お母さん、もう忘れかけた

ど忘れした。お母さんがプレゼントしてくれたのに、僕は忘れたなんて、なわけない。

「うん」

夕奈が続けて言つ。

「そして、あたしとゆみのペンダントが結合した新しい穴が開いているペンドントに、十夜君のペンドントで嵌めて」

僕は夕奈が言われるようにな、ペンドントを床において、そこで自分のペンドントを真ん中に置いた。

すると、ペンドントから眩しい光が放たれている。

「ザビシアンテンスロイン」

夕奈はまたも呪文を唱えて、そして、夕音の叫び声もなくなつた。

どうやら痛みが治まつたようだ。
しかし、そうではない。

夕音は気絶して、ぱたんと地面に倒れた。

今さら気づいた。夕奈は夕音の体にいるんだ。
やつと会えるけど、決して嬉しいことではない。

目の前に、夕奈が空に浮いている。

「夕奈ちゃん、どうして空に？」

「十夜君に言わないといけないことがあるの」

夕奈は真面目そうな顔で僕を見つめて、あえて笑顔を出してみせる。

とてもきこりはない笑顔だ。

その笑顔を見ると、心の中のやるせなさが消えない。久々に夕奈と
出会えたのに、なぜそんな気持ちを抱いているのだろう？

僕は夕奈を見つめる勇気をなくして、あえて目を閉じることにした。

「怖がらないで、目を開けて」

目の前に生まれたままの姿の夕奈が眩い光に包まれている。
墨染の空に純白な光に染まれ、やけに眩しい。

「あなたは？」

「十夜君が知っている、夕奈」

僕は目を擦つて確かめる。

どうやら夕奈が空に浮いている事実は変わらないようだ。

「十夜君、聞いて、あたしは人間ではない」

「ウソ……」

「嘘だ」

「へえ？ 夕奈は人間ではないの？ ありえないわ」

僕もお母さんも、その話に仰天して腰を抜かした。人間じゃなか
つたら、どうして僕のことを好きになる？ 人間と人間以外のモノ
との恋はみのるのか？ そんな現実でありえないことを……
「嘘ではない、僕はただの月の精霊だ、人間に恋してはいけないの
「月？ 精霊？ 夕奈ちゃん、何を言つてる？ 僕全然理解できな

い……」

僕は呆然と立ちぬく。今までずっと精霊と恋してることを、信じることができない。

信じがたい。

「ねえ、夕奈ちゃん、今言つてること全部嘘だろ？ せつだ、絶対嘘だ」

嘘だといつてくれ、そつすれば、話は終わることができるはずだ。

「ゴメン」

夕奈が口に出した言葉、肯定的な言葉でもなく、否定的な言葉でもなく。ただのお詫びに過ぎない。

だが、その瞬間、僕はすぐ理解した。やっぱり、夕奈は人間ではないことを、完全に理解した。

雷に当たったとしても、何の傷も無くて済んだのは不可能だ。それに、今は空に浮いていることは、普通の人間は絶対できることのないことだ。

「十夜君の側について、ゴメンなさい」

「十夜くんに恋して、ゴメンなさい」

「そして、十夜に愛されて、ゴメンなさい」

「あたし……あたし」

夕奈は泣きそうになつて、涙が零れそうな顔で僕を見ている。

「もういい……」

「そんなのどうでもいい……」

「たとえ夕奈が人間でも、精霊でも……」

「僕は夕奈ちゃんのことが好きだとこつ気持ちは変わらないんだ！」

僕は再び夕奈の前に告白した。今まで夕奈への気持ちを夕奈の前に吐き出した。

「あらあら、十夜ちゃんはずいぶん成長したわ、お母さん嬉しい」

「……」

僕は雰囲気を壊すお母さんが言つてることを無視して、決意のまなざしで夕奈を見てくる。

「……」

「うれしい、あたしはうれしい」

「でも、話だけで何も変わらない……」

「僕は十夜君の側にいればいるほど、傷が深くなつていくだけだ、あたしは……」

「あたしが十夜君の側にいると、十夜君の周りの人を傷つける」

「あたしは、のろいを掛けられているから」

夕奈が次から次へと口に出した爆弾発言が、心が何千万本の針にちくちくと刺されて、痛んでいる。

「もういい、これ以上言わないで」

「だめだ、これ以上言わないと、もう言えるチャンスがない」

「十夜ちゃん……」

お母さんは相変わらず何も言わずに、同情する田で僕を見ている。神さま、僕は一体何かいけないことをして、こんな酷い田に遭わせないといけない？ 大切な友達を失い、普通の恋をしようとしただけなのに、周りの人が僕のせいで傷ついたなんて。そんなことはもういやだ。

僕が幸せになると、周りの人気が傷づくつてもういやだ。

「十夜君……あたしね、やつと気がついた」

「あたしがずっと探している人は、十夜君のことだ」

「……」

僕を探すために、どこかの田舎から一人で旅立つて、ここまで来た夕奈は、一体何のために来ただろう？

その意図を明白にするために、僕は夕奈に聞く。

「どうして僕のことを探さないといけない？ 僕はべつにイケメンでもないし、背も高くないし……」

「こりゃ、自分のことを貶さないの！」

頭のてつぺんから痛みを感じる。

「あいてっ」

静かにずっと見ているお母さんは、僕の発言に対する反応に違い

ない。

「そんなのあたしは気にしてない、十夜君がここにいるなら、それでいい」

「……」

突然、夕奈の見に包まれている光が強くなり、色もそれにしたがつて、純白から螢光^{フローレンセント}に変わった。そして、夕奈の身体から、両側に羽根を広げ、ぱたぱたと扇ぐ。

「見たのとおり、あたしは精霊だ」

目の前の光景を見て、信じたくなくても信じざるを得ない事実だ。

「これがあたしのもともとの姿だった」

「ただ、のろいにかけられて、人間になつたの」

「……」

背中に羽を生えて飛んでいる夕奈は要らないから、普通で可愛い夕奈だけでいい。

「どうして今は元の姿に戻つた？ 僕はさうぱり分からない」

もうだめだ、精神崩壊する間際だ。早く終わらせてくれ……

「この姿を戻すために、十夜君がつけているペンドントと、十夜君からあたしへの『あい』が必要だ」

「僕のペンドント、そして僕の『あい』？ 何言つてるの？ そんなの関係あるわけないじゃないか」

「いや、あたしと結末のペンドントと、十夜君のペンドントを結合させるために、十夜君からの『あい』で浄化されないといけないの？ そうしないと、ペンドントが結合できないの」

「そ、そんな……」

あまりにも滑稽な話を聞かされて、頭がずきずきする。

僕の『あい』をもらうために、ここに来て、僕のまわりの人を傷つくのか。

「でも、のろいをかけられているあたしは、もともと他人のことを好きになることが許されない……」

「でも、そうしないと、のろいが永遠に解けない」

のろいを解けるために、僕からの『あい』が必要なのに、僕のことを好きになると、僕のまわりの人気が傷つく。なにこれ？ こんな漫画でも出ない話が僕にふりかかるなんて。僕は信じない、絶対信じない。

「ははあつ、あはは、はははああつ」

「十夜ちゃん、ゴメンなさい……」

僕は狂った。まるで太陽が西から昇るよ^う。世界も狂っている。僕も狂っている。そして……すべてが狂っている。

僕は精神の病^{やまと}にかかった精神障害者のように、甲高い声で笑っている。

「いい加減にしなさい」

後脳部が強く叩かれたことで、僕の意識が戻った。

「お母さん……どうして」

「夕奈のことが好きという気持ちは変わらないと言ったのに、今さら狂つたってどうするのみ？ 自分が言ったことはもう全部忘れた？ もう夕奈のことはどうでもいいのか？ 十夜ちゃん、いつの間にか、こんな意氣地なしになつたのよ、わたし……悲しいよ……」

僕は意識した。夕奈のことが好きだ。のろいをかけられても、精霊である存在でも、その気持ちはどうしても変わらない。

「わたしのことはいいから、さあ、行きなさい」

僕はゆっくりと夕奈のところへ行く。そして、また告白した。

「夕奈ちゃん、愛してる」

今の僕は、それしか言えない、他の言葉は何も思いつかない。おそらく、夕奈の心を動かせる言葉は、これ以外はないと思つ。

「……」

「ゴメン」

夕奈が口から発した言葉は、僕が望んでいる言葉じゃなかつた。

「今のあたしは、十夜君の気持ちを受け入れられないの……」

「あたしはもう人間ではないから、人間と恋することはできないの

……

そんなくだらない理由で恋することができないから、いつそ最初から恋しなかつたらよかつた。それはただの言い訳だ。逃げ道を作るための言い訳に過ぎない。

「僕は認めない、そんなの認められない！！」

「人間じゃないから恋ができないって、身勝手なことを言つんじゃねえ」

「あ、あたしはそういうつもりじゃ……」

「そういう気持ちじゃなかつたら、行くな、どこにも行くな！」

蛍光色の羽根がすでに夕奈が思うように扇げなくて、夕奈の身体がだんだんと落下している。まるで翼が折れた天使のように、扇いでも、扇いでも、飛べない。

僕は思わず前に行つて、夕奈を抱きしめた。

「十夜君、ダメ……」

「離して、抱きしめないで」

夕奈は僕を突き放そうとする。

「放さない、絶対放さない……」

「一度と離すもんか！」

せつかく戻したのに、手を放したら、また失うかもしない。チャンスはちゃんと自分の手でつかめないと、失つたら誰にも文句を言えない。

「十夜君、あなたはエゴイストだね」

「……お互い様だ」

「えい、やつ！」

力が失つたはずの夕奈の羽根が、強く扇いで、僕を弾きだした。

「グアニゾエ」

「か、身体が動けない……」

どうやら夕奈が僕に呪文を唱えたようだ。そして、僕の身動きが封じられる。

「十夜ちゃん……」

「お母さん、助けて」

僕はお母さんに助けを求める。だが、人間である僕たちは精霊に勝てない。

「心配しないで、十夜君、この呪文は自動的に解除されるから、卑怯だ、早く解けて、卑怯者、エゴイスト！ そんな夕奈ちゃんが嫌いだ！」

「！！」

お母さんは僕の言動にあつけにとられた。でも、ちよつかいを出さなかつた。

「はい、あ、あたしはエゴイストです」

「そんなわがままなあたしを、許してくれませんか？」

熱い雫を感じる。

夕奈の涙だ、夕奈が泣いている。

僕たちの恋が実らなかつたから泣いているだろう？ それとも、良心を咎めて泣いているだろう？

そんな夕奈を見て、僕も自然に泣けてくる。

「そんなわがままなあたしを、許してくれませんか？」

夕奈は2度と僕に問いかけてくる。答えが出なかつたら気がすまないように。

気づかないうちに、呪文が解けた。

「僕、夕奈ちゃんのことを許さ……んんっ」

不意打ちを喰らつた。

夕奈が突然目を開じて、口に向けてきた。

そして、僕の口を塞ぐ。

瞬時の出来事で、僕はすべてが分かつた。

これが、夕奈が、僕への、最後口付けをかわした……

だが、この口付けは、決して甘いのではなく、夕奈の涙を滲ませて、ほろ苦くて、切ないキスだ。

「ゴメンなさい」

「そして、さよなら……」

「夕奈……夕奈が消えていく、どうして？」

お母さんの言葉に驚かされて、僕は田を開けて確かめる。

田の前の夕奈の姿は、その存在感が次第に薄くなつていいく。

僕は夕奈の頬を触れる、女の子のそのすべすべとした肌触りはもうない。確實に夕奈の頬を触っているのに、その感触は髪を触っている、やうやくとしたように、妙にいやな感じがする。

「短い時間ですけど、こんなあたしと付き合ってくれて、ありがとうございます」

「行かないで……」

「もうダメです、あたしの身体がだんだん消えていくから」

僕はできるだけ夕奈を引き止めようとするが、夕奈はちつとも妥協しない。

「十夜君、最後に、お願ひがあるの」

「夕奈ちゃんのためなら、何でもする」

僕まるで奴隸はマスターから解放されたいと懇願しているような視線で夕奈を見ている。

それは、夕奈からの最初の、そして、最後の願い事だ。

「あたしが逝く前に、あたしのために、泣いてくれますか？」

「泣く？」

「うん、泣いて、くれますか？」

……

ダメだ、涙は、まるで水分が完全に吸われて干乾びたように、涙腺から何も出なかつた。

「やつぱり、ダメですか？」

「ゴメンなさい……ゴメンなさい……ゴメンなさい」

再び自分の無力を痛恨する。一つの感情が奪われたつて、どんなに悲しいことか。

泣きたくても泣けない。そういう切ない気持ちをなんとでも味わつたのに、今回だけは特別に切ない。

やるせない、その次もやるせない。

無数のやるせなさは、ただ立て続けに僕の内心を侵蝕して、心を蝕んでいく。

「あなたの彼女がそろそろ逝くんですよ、それでも、泣いてくれないの？」

「ゴメンなさい、僕、僕は……」

目がかすかになっている、視界がぼやけている。

「行かないで」

最後のあがき。たとえ何もできないと分かつていながらも、僕はただ夕奈に懇願する。だが、夕奈は頷いてくれなかつた。そして、夕奈の体が次第にぼやいていく。

「もう時間だ……あたしは、もづ行かないといけないの」

「あたしはもともとこの世界に存在しないものだから」

「こんなあたしを好きになつて、愛してくれて、ありがとう」

ありがとう……

そして、やよいなう……

眠る大地に、風がそよぐ。

田の前の女の子が、姿が消され、一つの翡翠となり、ゆづくつと僕の手に落ちる。

それが、結末の下弦月のペンダントと夕奈の上弦月のペンダントと僕の月型のペンダントがあわせて作られた、新しい翡翠だ。

「うそ……」

「夕奈ちゃんが消えた、うそだろ……」

僕は翡翠を胸にしまひ。

「夕奈ちゃん、夕奈ちゃん」

「夕奈ちゃんあああああああん……」

その叫び声は、町中に拡散していく。

「あれ？ どうして？」

僕は目を擦つてみる。涙氣を感じられる。

僕は泣いている。

これは、間違いなく、僕が生まれて初めての、他人のために流れた涙だ。

完璧な涙が、流れた。

ぱたぼた……

目頭が熱くなつて、堰を切つて涙がどんどん流れ始めた。僕は確実に泣いている。

お母さんは切なそうに、側にずっと僕のことを見てこむ。

「と、十夜ちゃん……」

「お、お母さん」

「僕、僕は失恋した……」

「うわあああ

お母さんはそつと僕の頭を撫でる。

「ねえ、十夜ちゃん」

「人間は、生きていらむうちに、必ずたくさんの中を得られます。ですが、そのうちに、きっと失われるものがあります」

「お父さんと離婚したとき、わたしも毎日涙で顔洗うような日々を過ごしていくの、ですが……」

「たとえお父さんを失つても、わたしには、息子のあなた、十夜ちゃんがまだわたしの側にいるから、だから」

「だから、泣かないで、夕奈を失つても、わたしもずっと十夜ちゃんのそばにいますから」

さらりに涙が止まらなくなる。今まで夕奈と一緒にいた時間を思い出したら、なま暖かい涙はまた頬を伝つて、翡翠を濡らした。

「お母さん……」うわあああああ

夜明け前、僕はずつとお母さんの胸に泣いていた。

何年間も泣いてないのに、この日こそ、その何年間も溜まっていた涙を、全部流れたような気がする。

一つの感情は、もはや取り戻した。

Hピローグ

「行つてくる」「
「気をつけてね」「
あつという間に、もう半年過ぎていた。
集中治療室にずっと眠っている浩平は、既に起きて、今はリハビ
リ中。大切な恋人が失った傷は、大切な友達が癒してくれる。
今日は、いつものように浩平の見舞いに行く。
「おはよう」「
「よつす」「
「身体の調子はどう?」「
「イマイチだ、歩くのも大変だぜ」
確かに、病床の隣に、松葉杖が置いてある。きっと歩行の助けと
して使つているだろ?。
「今日は特別として、僕はおまえの松葉杖になる」「
「マジか? いえい、レッツゴー」「
「つで、どこ行くつもり」「
「もちろん綺麗な白衣の天使さんがいっぱい集まってる場所だぜ」「
僕は思わず浩平の頭を叩く。
「いてつ、なにすんだよ、おまえ」「
「ナースがいっぱい集まってる場所なら、ここじゃないのか? 寝
起きが悪いのか? おまえ」「
「わりい……わりい……どこに連れて行つてもりつてもいいから、
とにかく、このくせーなにおいがマジ勘弁してくれよ

「けが人のくせに、けちをつけるな」

「へいへい」

浩平はしぶしぶと答える。

「とりあえず、行こうか

一
う
二
す

僕は浩平の身体を支えながら、ゆづくりと歩いていく。部屋を出

る際は、お困りでしたら会いた。

「あ」
十夜

「中華書局影印」

「おせよひ、浩平くん」

「おばちゃん、今日も綺麗だね」

『詩經』卷之二

相変わらず、口だけが甘い。

一 今田のパン　ぐわー

僕は浩平は加藤を強打した

いのか

「ゴメン、力を入れすぎた、というか」

「ナンパしてもちゃんと対象を選べよ」

「すまん……」

お母さん、いきなりここに着て、僕を探そうとした？」

縣の

「いよいよ、今行こう」

「ねこ、俺のソルジャーなんだ?」

「けが人だから、おとなしく寝ろ」

「ウタウタ」

お母さんは浩平を見て笑っている。

「」」」」」」

浩平専用の松葉杖役をやらないで、お母さんと一緒にお墓参りに行つた。

結末は夕奈が消えた日に、僕のお母さんを身代わりになつて、夕音の攻撃を受け止めて倒れて死んだ。そもそも結末は夕奈と違つて、歴とした人間だから、夕奈のように、雷に当たつても傷つかないモノではない。

その日に、夕奈が消えた同時に、夕音も消えた。それは、おそらく誰にも分からぬことだと思う。夕音は一体何者か、誰にも分からぬ。なぜ夕奈は取り憑かれるか、誰も知らない。

僕たちは結末の墓の前に立つている。

今でもすごく後悔している。なぜ結末がいきなりこっちに謝つてくるか、もう分かつた。だが、謝ったのに、かえつて殺されて、これだけを思うと、涙がどんどんあふれて来た。

「ゴメンなさい……ゴメンなさい……僕のせいで」

僕は頭を地面に叩く。だが、起こつた事実は変わらないと分かつても、僕は頭を叩くのをやめなかつた。

「もういいの、いいの、十夜ちゃん」

「十夜ちゃんのせいじゃないの」

「自分に責任を押し付けないで……」

「でも……」

僕は夕奈のことを好きにならなかつたら……

僕は夕奈と出会わなかつたら……

一人の命を犠牲にしてもう一人の命を救うのは、いやだ。

あの日、僕たちは出会わなければ、今も笑えるのだろう。せめて、

夕音が現れなくて済んだ、結末も殺されなかつた。

結局、誰も幸せになつていなかつた。

「でもなんかじゃない、もう自分のことを咎めないで……」

「誰も望んでいないことが起こつたからには、今さら田の前のものをもつと大切にしないといけない」

「田の前のものをもつと大切にしないと、失つたらきっと後悔する

よ

「ほら、ちやんと結末に挨拶して」

「うん……」

お母さんが言つた言葉を反芻する。僕は本当に夕奈のことを大切しているのか?

愛し合つ一人をどうやって相手を大切にする? 真心を込めて相手を愛する? お互いの身体を求めて愛し合つ? 大切にする方法は一体なんなのか? 人によって違うだろ。それより、一番大切なのは……

僕はここにいる事……

お母さんはここにいる事……

浩平が無事に生きている事……

そして、夕奈、結末がいた事……

かつて僕と夕奈は愛し合つた事……

僕は大空を見る。

水色の空に、ビートなく夕奈の顔が浮かぶ。

「夕奈ちゃん……」

「たどえこの世に居なくとも、あなたはずつと僕の心の中ここにいる……」

「あなたの微笑みを忘れない、絶対忘れない……」

いつか、どこかでまた夕奈と会えること……その日を待つていてる。

「はい、これ」

僕はお母さんから花束をもらつて、結末の墓の前に置く。そして、その隣に、僕の翡翠を置いた。

「結末ちゃん、ここでゆっくり、安らかにお眠りなさい……」

僕が最後に結末に言つた言葉だった。

「十夜ちゃん、どうして？」

「辛い思いを抱えながら行き続けるより、僕はその辛さをどこかに置いておきたい」

必ずここに戻ってきて、翡翠を取り戻すから。

それはいつか分からぬ。

帰る前に、僕はもう一度夕奈の墓を振り向いた。不意に涙が零れ落ちた。

流れない涙は、また頬を伝つて流れていった。

第5話（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0013d/>

流れない涙

2010年10月8日15時11分発行